

西野さんちのメ級

ユグノート

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

横須賀市で普通に暮らす一人の女性社員西野さん。そんな彼女の家に深海棲艦が!?

酔っぱった際に助けた謎多き人類の敵が恩を感じてただの人である彼女の自宅で家政婦（メイド）として過ごすことになる。そんな事があり彼女のもとには人ならざるものが集まるように……

目次

第1話	グッドモーニング	1	深夜のコンビニの話	76	
第2話	うちのメイドは深海棲艦	8	第9話	突然の訪日の目標はお姉さん？	86
第3話	本当に深海棲艦なんです	16	第10話	第2の深海棲艦	98
第4話	ユアネーム	25	第11話	古姫の眺めてるもの	109
第5話	深海ですらつけない深淵	31	第12話	古姫の学校デビュー！の前に	118
第6話	とりあえずは黙認です	39	問題発生		
第7話	やること無くて死にそうです	52	第13話	結局生き恥を晒すのは君だった	126
第8話	ナギサの社会見学	61	第14話	古姫中学校へ行く！	136
			深夜のコンビニの話	2	146
			第15話	隠し事ばれちゃいました！	156

第16話 夜戦最強が聞いて呆れる

167

第1話　グッドモーニング

時は戦争の時代、と言つても人間同士の悲しいものではなかった。

現在人間が戦っているのは深海棲艦と呼ばれるどこから来たのか何故攻撃してくるのか等わかっている事の方が少ない敵である。

ただわかつているのは向こうに明確な敵意があること、そして圧倒的に強いことだ。そもそも物量が違うしその上こっちの兵器が効かないなんてズルいよ。

もちろん人間側だつて対抗手段はあつた。艦娘と呼ばれる少女が深海棲艦と互角以上の戦いをしていくとか。

ただ彼女達に関する情報は秘密扱いされていて世間にはあまり情報がないこと、彼女達の頑張りで戦線が押し上げられていて日本が戦場になつていないこと、等等など色々理由はあるけどぶつちやけ今行われている戦争に現実味が全くない。

艦娘はおろか深海棲艦すら見たことのない人がほとんどだろう。なのでいざ戦争が起こつても私達の生活には何の影響なんてなく本当にあるのかすらわからずに生きている。

「うええんもうなんなのさ」泣

「うんうん、飲め飲め。そして忘れるんだ。」

私は西野、横須賀市にある大手商社の支店にて平社員をしている者です。この日は同僚で同志である東田にやけ酒に付き合つて貰つていた。

「ありがと……ゴクゴク、ぷっはくだいたいなんなのさあの上司！私にばかり仕事押し付けてくあれあの人の仕事でしょう？」

「まあ……西野さんはあの部署の中では仕事できる方だからね。」

「こんなに仕事頑張っているのに報われなく！それにあの量押し付けておいてあの人が何て言つたと思う？」

上司『コラッ！西野！まだ終わつてないのか！』

「だよ！酷くない!?」

「確かにそれは酷いね。」

「別に今の職場は嫌いじゃないよ……でもこんなの続いたら……」

「滅入るよね。」

「うん……」

「そう言う時はねえ。気分転換すれば良いと思う。」

「気分転換?」

「そう。例えば生活環境を変えて見るとか楽しい事して思いっきり発散するとかね。」

「では立案者ゝ次の休みの日……」

「ほほほ♪勿論お付き合いますよ。」

「わーい♪」

それから西野は楽しくなったのか更にお酒が進んでいった。

「ねえ?そんなに飲んで大丈夫?」

「ダイジヨブ〜♪ダイジヨブ〜♪」



結果、西野さんは出来上がってしまった。

顔は真っ赤で少しふらついていた。その手にはあまりの飲みっぷりに感心した店の大将がくれた一升瓶が……

「本当に大丈夫？何なら送って行くけど……」

「ホントにいいよ、だって東田さんの家って私の所の反対だし悪いよ。」

東田の申し出を断り二人は駅で別れた。

『まもなく発車します』

「よしっ！間に合った。」

帰りの電車に乗れた西野さん。今日は珍しく車内に人はまばらだった。なのでいつもは座れない席に座ることができ酔っている西野にとってはラッキーだと思われた。

ただそれが彼女の不運でもあった。

「スースーZz」

ついつい寝てしまった彼女、降りるはずの駅を越えてしまった。

「はう。降りないと。」

そして、目が覚めた西野は何も考えず電車から降りた。目的の駅から3つ先の駅である。

「あれれ？うちの近所、こんなに海が近かったつけ〜」

しかし酔っぱらいの彼女は気付かなかつた。

そのまま海岸を歩く彼女

「う〜ん、なんか音が聞こえる。爆発音？誰か花火でもやっているのかな？」
遠くから聞こえる大きな音、しかしそれはしばらくすると鳴りやんだ。

「うんん……何だったんだろう〜あつ！」

うつかり酒瓶を滑らせた。

市内のマンション 西野さんの部屋

「う、うーん……」

朝の7:00

西野は目をこすりながら起き上がる。

「頭痛い……飲みすぎかな……」

社会人たるもの酒は飲んでも飲まれるな、以後気を付けないと……
「でないといつか誰かに連れ込まれたり……うん？」

私の布団、私と別に膨らみが……

「う、うそ……」

私は恐る恐る布団をめくろうとする。すると……
もぞもぞ

「ひいー！」

膨らみは勝手に動き出し正体を現した。

「シーナニ？……もう朝なの？」

出てきたのは黒髪の美少女

長い髪に真っ白な肌はどこか浮き世離れた美しさがあった。ただそれらは顔の半分を覆う黒いマスクのせいで目立たないが……

「アツ……おはようございます」ペこり

い、一体！何がどうなってるの!!?

第2話 うちのメイドは深海棲艦

西野さんは困惑していた。

それは当然である。起きたら知らない人と一緒に寝ていたのだ。それもこんな不思議な子と。

「あの……どちら様で？」

「覚えてないのです？」

覚えてないです。てか昨日駅で東田さんと別れた辺りから記憶があやふやです。

「あれ、てかそもそも私昨日はどうやって帰って来たの？」

「それは私が担いで来たからです。」

「か、担ぐ!？」

「あ……いえ誤解です！アナタから頼まれてこんな風に……」

彼女はそのやり方を再現してくれた。

しかしそれを見て西野は顔を両手で隠した。

(それってお姫様抱っこじゃない!!)

「そのあとはまとまりのない指示のもとここまで来たのだが」

ふむふむ、つまり酔っぱらいのいい加減な道案内でここまで運んだと。

「それでそのまま帰ろうとしたら……」

『君、行く宛あるの?』

『………ない。』

『ならここに住む?』

「と、言われました。」

何やってんだよ私……

待って、この流れでこの子と寝てたってことは……

「私、それ以外に何かした？」

「何かしたとは？」

「いや……その……」

「されたと言えば……」

少し考える彼女。やはり私はとてつもない過ちを……

「メイドのなんたるモノかについて教えていただきました。」

「へえ？」

『いや、うちに来るならアナタにはメイドとして働いてもらおうかな。』

『メイド……』

『どうかした？』

『メイドとはなんでしょう？』

『………』 ぷるぷる

『あ、あの……』

『信じられない！メイドを知らない何て！アナタ今までどんな環境で住んでいたの！ずっとガリガリ勉強してたの!?!』

『へえ？いやそもそも私は……』

『ハイハイ、こうなれば私が一からメイドとは何か教えて差し上げからね。覚えるまで寝かさないよ♪』

『こ、怖い……このニンゲン怖い……』

「と言う感じになって結局二人して寝ちやったいわけです。」

「な、なるほど？」

私、酔っている間になんてことやらかしてるの！

「私……アナタには感謝しています。温かい声をかけていただいて。手を差し伸べて下さって……私！西野さんのメイドとして一生懸命……」

「ストツプストツプ!!」

「西野さん？」

「なんだかよく分からないけど、私は人を雇う気はないですよ。」

「ええっ！」

「私、平の会社員だからそんなにお金持っていないからアナタを雇えない。」

「大丈夫です。私お金なんて興味ありません。」

「そういう問題ではなくて……」

「私お役に立ちます！」

「それでも無理なものは無理だよ。というか君は私のとこなんかのメイドでいいの?」
「私がかまいません!昨日アナタに出会わなければ私は死んでいたかもしれませぬ。なればこの命は西野さんの物も同然です!」

「いや!重いから!私本当に昨日何したの!?!」

「アナタが覚えていなくても私が覚えてるから問題ないです。だから私はアナタといた
いです。」

「……………」

「やっぱり…………ダメですか?」

「……………」

彼女が見つめてくる。いや、マスクが邪魔で視線はわからないけど。

彼女には申し訳ないけれどやはり決断できない。あまりに突然過ぎる。無理だ。

「守れもしない約束なんてしてごめんなさい。でも無理なんです。」

「うっ」

彼女が落ち込んで下を向く。

「ごめんなさい……………」

罪悪感が凄い……

「いえ、私も無理な頼みをしてすみませんでした。一晚匿ってくれただけでもありがたいのに……」

彼女はすつと立ち上がる。

その際に彼女にかかっていた毛布が落ちる。

「あ、アナタ！それ！」

毛布の下からあらわになったのは肩から胸の辺りまで広がる大傷を無理やり止血した包帯だった。

「これですか？昨日に比べれば大分元に戻ってますよ。」

「もしかして……それって……」

「はい、アナタが止血してくれました。」

（これ自体にはそこまで感謝はない。ただあの時、この人に会ってなければ私は今頃死んでいた。）

「それでは……」

「待って。」

出ていこうとした彼女を西野は止めた。

「そこまで手を差し伸べておいて……見捨てるなんて、そんなの人でなしだよ。」

「そ、それでは！」

「うん！アナタを雇います。」

「ホントですか!?!ありがとうございます♪」

まあ一人暮らしから二人暮らしへと生活環境を変えて気分転換とでも思えば良いだろう。

「あつ！そういえば。」

「？」

「私はまだアナタの名前知らない。」

「あ、いえ。私には名前なんてありません。」

え？本気で言ってるのこの子？

「ちよつと、なんなのさ。メイドを知らない環境で育てられたどころか名前すら付けてもらえないなんて、どんな酷い環境だったの？」

「あの……先程から申し上げたかったのですが。」

「はい？」

「私、そもそも人間ではなく深海棲艦です。」

「……………えっ？」

「私は深海棲艦の巡洋艦です。」

「え、ええええっ！うっそー！？」

「お金とかは本当にいらないのでよろしくお願いしますね西野さん♪」

「すみません、もう少し考えさせて。」

しかし、そうこうしているうちに出勤の時間が来てしまい考える時間はゼロ。彼女は今日から我が家のメイドとなったのだ。

第3話 本当に深海棲艦なんです

「ボケ〜」

「どうしたの西野さん……いつも以上に死んだような顔してるけど？」

「え？ああつーいや、何も無いよ。」

朝の騒ぎからなんとか遅刻せずに出勤した西野

しかし、朝から頭を使い過ぎたので少しフリーズしていた。それを見た隣のデスクの東田さんが心配していた。

「そう？何かあつたら言つてよ。」

「うん、ありがとね。」

「こんなところあの上司に見つかつたらまた何言われるかわからないからね。」

「おい、昨日の騒ぎつて鎮守府の方からだよな。」

「お前も聞こえたのかあの爆発音。あくまで噂だけだよ、戦闘があったらしいぞ。」

「マジかよ。鎮守府は何やってんだよ。」

「大方、その鎮守府を狙った奇襲ってネットじゃ上がってるぞ。」

今日は皆何かの話で持ちきりらしい。

なにになに？今朝はニュース見てないから知らないんですよ。

「そういえば。西野さんの家の方向って鎮守府がある方だけど大丈夫だった？」

「何が？」

「何がって……昨日何やら爆発があったみたいで、目撃者によると砲撃戦だったらしいの。ニュースでもやってたよ。」

「いやー今朝は寝坊しちゃって……へえーそんなことが……」

少し思い出した。昨日花火か何かと思ってたあれのことだろう。

「まあ、敵も小規模だったらしいからすぐで撃退されて被害も出てないらしいけどね。」
うくん、襲撃事件ねえ……

ま、まさかあの子、ホントに……

「うんん？」

その頃西野さんの自宅では彼女が唸っていた。

彼女は西野に読んでおくようにと出る直前に渡された本を読んでいた。タイトルはメイドの歴史。

「つまり、メイドとは主人の身の回りのお世話をするお役目というわけですね。つまり、艦隊旗艦とその配下のような関係をイメージすれば良いのでしょうか？」

人の感覚がイマイチわからない彼女は彼女なりの理解の仕方ですら必死に理解に努めていた。

「この家事とは何のことでしょうか？うんん……うんん？」

彼女はある事に気が付いた。

人の気配である。入り口の方に人がいるようだ。

「西野さん……ではないですね。」

この時、彼女は出かける時に西野に言われた事を思い出した。

『そ、それじゃあ行ってくるから大人しく留守番しててね。』

『あの……留守番とは？』

『えっ？そうね……私がない間この家を守る仕事よ！』

『守る……わかりました！私、身を呈してでもここを死守します！』

「フフフ……」

「アニキ、早くしようぜ。」

「まあ慌てるなって、どうせこの時間はここの奴はいないんだ。ゆっくり仕事ができるぜ。」

西野宅に侵入を試みようとしているのはアニキと呼ばれたスキンヘッドとその舎弟の両耳にピアスをした男だ。

「まっ、どうせいたとしてもこの住人は女だしな。」

「ギヒヒッ、ノープロですね！」

ガチャ

「よしっ！開いたぞ！」

西野宅に侵入する二人、中には誰もいない。

「さあ〜とと、どこから探すかな。」

「アニキ！後ろ！」

ところが二人の後ろ、丁度退路を塞ぐ形で彼女が立っていた。

「フッフ…：…入る所を間違えてますよ？けれど残念、アナタ達の帰り道はもうないのよ。」

「あん？住人いたのか？邪魔されないように痛めつけて…：…」

彼は彼女をただの少女と思った。が、しかし不運なことに彼女は深海棲艦、たかだか人間二匹でどうこうできる相手ではなかった。

彼女の左腕に大きな口の装備が現れる！

「ヒィー！な、なんだ！」

「あ、アニキ〜!?!」

ぎゃあああああああああ！

「あー今日も疲れたな……」

仕事が終わリマンションに帰って来た西野さん。

そのマンションの入り口近くでは、

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

「今日からまつとうに生きてます今日からまつとうに生きてます今日からまつとうに生きてます……」

スキンヘッドとピアスの男達がぶつぶつ何か呟いていた。

「ただいま〜」

「おかえりなさい西野さん♪」

「何も問題はなかった？」

「はい♪あ、そういえば、今日部屋を間違えた人がいました。」

「へえ〜で、その人にどう対応したの？」

「はい、正しい所を教えて差し上げました。」

「そっか。(表のは思い過ごしかな?)」

「あつしまつた。」

彼女は何かを思い出したようだ。

こほんと改まる。

「お勤めご苦労様です西野さん。お食事の準備ができております。」

「おおっ！なんかメイドさんっばい！」

「えへへ♪」

キツチンから彼女が持ってきたものを見て西野は絶句した。

「どうぞぞー！」

「いや、どうぞぞって……」

彼女が持つてきたのは黒い塊に黒いドロドロした液体だった。

「な、ナニコレ……」

「え？消化しやすくする熱した鉄に燃料です。」

えー……？

「はあ……これは……」

「西野さん？」

「一から教育した方が良いかな。」

「え?!わ、私どこがおかしかったですか?」

「鉄なんて普通食べないよ!」

「そうですか?」

そう言つて彼女は黒い塊を掴むとガリガリ噛み砕いていく。

ええっ! 本当に食べちゃうの? ああでも彼女は人じゃないし……深海棲艦の食生

活つてどうなつてるのよ!

「ああもう！とにかくアナタは人間の常識から教えますね！」

第4話 ユアネーム

彼女との同居生活が突然始まって早くも一週間が過ぎようとしていた。

西野さんからの徹底した指導により（ネットの使い方を教えて勉強させた）家事のやり方や一般常識を覚えた彼女はいいよメイドらしくなってきた。

出勤しては疲れて帰って来てぐったりしていた西野さんもおかえりがある安心感や家事をやらなくて済むようになり前に比べると表情に余裕ができていた。

今ではエプロン姿が板についた（料理ができるとは言っていない）彼女は現在食後のテーブルを綺麗にしている。それを見ていた西野は余裕ができたおかげなのか、ここに来てようやくある事に思い至った。

「ふふふ」

「ちよつといいかな？」

「はい♪なんでしょうか？」

「いや、今さらなんだけど、本当にアナタには名前がないんですね。」

「はい。そもそも私達には人間で言う命名文化がないので。」

「でもそれだと深海棲艦って普段どうやって相手と会話してるの?」

「えーと……」

『おい!お前!ちよつと来なさい!』

『は、はい!姫様!』

『左側!弾幕が薄いぞ!』

『はい!旗艦様!』

「てな感じで不便はないです。」

「お前とか左ってたくさんいたら間違えそうな気が……まあ少なくとも私はないと不便なのよ。」

「と、言われなくても無いものはないですし、人間から呼ばれてる名称はちよつと好きではないので。」

「そうなの?」

「はい、なのでどうしても言うのであれば……に、西野さんに付けてもらえないでしょうか？」

「わ、私!？」

「こ、こう言うの、言い出しつべつて言うのでしよう? なら西野さんに付けて欲しいです。」

な、なんなのさゝ

私に名前を付けろつて……私名前考えるの苦手なんです! この前なんてゲームのキャラ名、考えるの面倒だからつて a a a にしたんだから!

まあでも今後外に連れ出す時とか人が来る時とかに名前がないとかがつてなると変に疑われるし……

そう言う意味でも名前は必要だね。ああつ! 名前の重要性が上がつた! ますます適当な付け方ができない!

「西野さん?」キラキラ

うわゝ彼女が物凄く期待してるよ。

考えろ……そ、そうだ! 彼女との出会いをヒントにつてその時の記憶があやふや!!

わずかに覚えてるのは潮風に花火(砲撃音)

そして、靴に入っていた大量の砂……

これらの事から私がいたのは……

「砂浜……うーん、もつといい言葉は……」

ヒントを得た西野は考えた。

「渚……うん！これだ！」

「西野さん？」

「今日からアナタはナギサね。どうかかな？」

「ナギサ、ナギサ……はい！音の響きが良いです！今日から私はナギサです！」

名前は気に入ってもらえたようだ。

「さて、これで懸念材料が消えたことだし。メイドさんに今後の日程を伝えるね。」

「お仕事ですね！なんででしょうか！」

「今週末、休日私の同僚が遊びに来るの。だからアナタはその時はしっかりメイドらしい接客をお願いするね。」

「任せてください！接客はバッチリですよ！」

「へえ♪そうなの？なら見せて！」わくわく

「では……お帰りなさいこの変態ご主人様様♪まずお食事ですか？それとも浄化ですか？それとも、私と遊びますか？」

最後の方で彼女から殺気が漏れる。

「ああでもですよ。西野さんとなら遊んでも良いですよ」えへへへ

「怖いよ！一体何をする気なの！てか色々違う！何がどう違うのかツッコむのはやだけど、とにかくメイドの接客じゃない！」

「えくでもネットで見たのには……」

「いやいや！混ぜすぎ！ネットで確かに紛いはあってもそれはメイドさんじゃないの！」

「そ、そうなんですか？」

「こうなったら私が直接叩き込んであげるわ！今夜こそ寝かさないとわよ！」

「ふふふっ！先日は未知の恐怖で臆しましたが、私は夜戦部隊の旗艦ですよ！夜戦なら負けませんよ！」

こうして二人は夜戦へと突入！

(やましいことはしてません。ただのメイド講義です。)

「だからくもつと恥じらいを！」

「嫌ー!! ニンゲン恐ーい！」

しかし結局やられたのはナギサの方だった。

第5話 深海ですらつけない深淵

なぜ、こんなことに成つてるのでしようか？

この私が、ここまでニンゲンに恐怖させられることになるとは……

これまで彼らに大砲を向けられたこともあつた。爆弾を空から落とされることもあつた。ある時は無謀にも刃物で斬りかかられたこともあつた。それでも私は奴等の事を恐いと思つたことはなかつた。

西野さんの所でメイド？とか言う役目を貰い住まわせてもらつてから早数日。

彼女との生活に不自由がないようにと人間どもの常識とか言うものを勉強している。

いくら愚かな生物とは言えども仮にも知的生物である。ならその常識は自分でも理解できると考えていた。

しかし、いざ学んで見ると人間の社会の有り様というのは実に奥が深い。正直、ある一定の分野のことなどについてなら我々深海棲艦でも取り入れる価値があると思う。

ところが今日……

私はより人間の深みに、不理解のドン底に突き落とされることになる。そして今日ほどニンゲンが怖いと思ったこともなかった。

週末……

人間たちの大体は休日を取るらしい。

まあ疲れ知らずの我らにすれば必要のないものではあるが好きな事をできると言う点について素晴らしいと思う。

現にこの日1日中西野さんが家にいて構ってくれるのだ。素晴らしきかな週末……

今日の夕方頃に西野さんの同僚で同志と言う人間が遊びに来るらしい。

どんな奴かは知らないが来るならこい！

そして、迎えたこの女性が西野さんの同僚？

一見落ち着きのあるただの人間である。

なにやらケースを持ってきていて大荷物だが……

「この子がナギサちゃん？ うん、流石は西野さん。よく仕込んでますね。」

「いゝや、まだまだだよ。」

到着してすぐ仲良く語り始める二人。

西野さんがあんなに楽しそうに話すのは見ていてこつちも嬉しくなるが、その相手が自分で無いことに軽くあの東田とか言う人間に殺意が沸いてくる。

やがて二人は買い置きしていた缶ビールを空け始める。なのでかねてからの予定通り私は軽く料理を作り始めた。

ここまではほぼ予定通り……

そして、あの人間も最初の印象通りのなんでこんな奴が西野さんと、と考えてもいたがアルコールが入り一時間もしないうちに様子がおかしくなる。

「だからね！私は嘆かわしいんだよ！最近は何い物が増えすぎてるの！」

「いえいえ！それは極論と言えますよ！」

「違わない！」

「違います！」

「ど、どうしたのですのかお二方!?!」

突然の怒声に思わず火を止めて駆けつける。

「ああっナギサ！いいところに。ナギサはわかってくれるよね？私が教え込んであげたんだからー！」

「えっ？な、なにを？」

「こらっ！押し付けはよくないですよ！ナギサちゃんもそんな格好してるってことはやっぱりこっち派だよえ？」

「東田さん！彼女は私のメイドよ！」

「誰のメイドでも価値観の押し付けは良くないことは私達が一番知ってるのでは？」

「押し付けじゃないもん！絶対こっちのほうが似合うもん！」

「なぜか既に彼女には目隠しキャラが出来上がってるのだからそれを活かさないなんて

邪道よ！」

「むむむむむっ!!」

こ、これはどうすれば……

なんか二人ともさつきより言葉づかいが荒くなってるし顔真つ赤だし……何がどうなってるの!?

「け、喧嘩は止めて下さい！一体何の話をしてるんです?!」

「何ってそれはナギサちゃんが」

「伝統派かコスプレ派のメイド服のどっちが似合うかって話を」

「ちよつと西野さん！コスプレ派は酷い！ロマン派って呼んでついても言ってますよね?」

「何がロマンよ！あのねメイド服はねえ言うなれば仕事着！決められた形式のないその仕事着を着たメイドの仕事姿と服の総合美術こそが至高なのよ！」

「アナタこそ何をおっしゃる！その長いメイドの歴史の中で生まれた白黒の服……そう！今日メイド服と呼ばれる様になったあの服の歴史、そして時代と共に錬成され美しくなっていたことにこそ美のロマンが隠れてるの！」

「なあにが歴史よ！それっぽい事を言ってるけど！それこそが今のような紛い物を生んでいる元凶なのよ！」

「古い!!古いんですよ西野さんはっ!コスプレと呼ばれるメイド服……それもまた時代の流れによって派生した別の姿、またメイドという人種への仕事、需要の変化多様化の表れなのよ!」

「あんなゴスロリで仕事ができるかつ!!可愛さの重要性は重々承知してる!けれどあれでは総合美術としてのメイド服としては認められない!」

「確かに!可愛さはその身のこなしから生まれる美しさと服の足し算:いえ!掛け算であることは私も十分理解してます。けれど!」

東田はナギサの方を見る。

「こんな綺麗な子に仕事着としてのメイド服を着せるなんて勿体無いのです!」

「それはわかる。だからこうして話が纏れて……」

「そうです!このまま話し合ったら收拾がつきません!なので……」

東田は持つてきたケースを開ける。

「私が作った様々なバリエーションの服があるので着せて見て白黒つけましょう!(メイド服だけに)」

「いいね東田さん！私の言ったことが正しかったって事を冥土の土産にしてあげる！
(メイド服だけに)」

二人はバツチバチに目から火花を散らす。

「あつ！火で思い出しました。そろそろ料理の続きを……」

ナギサはこれまでの経験から培った勘ですぐさま逃げる事を選択する。

「待つてよナギサちゃん」ガシッ

「誰が戻っていいって言った？」ガシッ

「い、いや……その……」

しかし逃げられなかった。

「せつかくアナタの為に作ったのですから着て貰わないと……ね？」

「ほら、脱いでよ」

「ぬ?!い、いえ脱げと言われましてもこれ装甲のようなものですし……」

「つべこべ」

「言わない」

二人は強制実行！

い、いやあああああああ！

「ほらね、やつぱり白黒が一番似合う♪」

カシヤカシヤ カシヤカシヤ

「く、くやじい……でもナギサが可愛いから許す！」

カシヤカシヤ カシヤカシヤ

「……………」

二時間に及ぶ着せ替えの結果……

勝敗が付き、二人はメイド服のナギサを写真に納め始めた。一方、ナギサはぐったりとしていた。

「あ、そのメイド服はあげるから使ってね♪」

「ハイ……………」

第6話 とりあえずは黙認です

横須賀 某商店街

商店街なんてものは大型商店の出現で絶滅危惧種にまで追い詰められた。しかし、深海棲艦の侵略で一度はシーレーンを滅茶苦茶にされた影響は大きく今では生き残っている大型商店の方が珍しい。

その辺の理由は諸あるが……

今はそれよりも重要な事がある。

「〜♪」

そんな商店街にメイド服に身をつつみ、少し上機嫌で買い出しに出掛けて来た深海棲艦（ナギサ）の姿があった。

東田からメイド服をもらって以降、買い物も彼女がこなすようになっていた。

（今日は何を作りましょうか〜♪）

ここ数日、急速に料理の腕を上げたナギサは昨日とうとう西野から美味しいの一言を貰ったのだ。

「フフフ♪もつと誉めてもらえるようにもつと努力しますよ〜」

さーて：：今日の献立は何にしましょうか。ここに来ながら決めようと思いましたが、結局何も思い付きませんでした……

恐怖の象徴とされる深海棲艦がまさかこんな商店街の中をこんな事を考えながら歩いているとは誰も思いもしないだろう。

それだけ彼女は自然に人に紛れていた。いや、自然ではない。「相変わらず少し視線を感じますね……」

それもそのはず、白黒メイド服を着た顔を隠した少女がいたら注目を集めるのは自然であろう。

なのでそんな彼女に興味を持つ者は多く……

「やあナギサちゃん。少し見てかないか？」

「あ！お肉屋さん、こんにちわ。」

声をかけたのは少しガタイの良い肉屋の店主。

「今日はいいひき肉とか鶏が入ってるけど、晩ごはん何にするかとか決まってる？」

「いえ、まだ決めてなくて……」

ナギサはふと悩んで見せると肉屋の店主は

「それなら今日は肉にしてはどうだい？肉はいいぞ、疲れた時に食べる肉の味は最高だよ。」

疲れた時に食べる！

そういえば最近西野さんがお疲れの様子だった。なんかノウキとかこのままだとデスマとか言ってたような……

「特に鶏肉は唐揚げにでもして酒と飲めばそれはそれは……」

お酒！確かに西野さんはお酒が好きだ。

「これは決まりですね。」

「ではその鶏肉を……」

「ちよつと待った!!」

肉屋にその鶏肉をくださいと言いかけたのに待ったをかけたのは肉屋の向かいの魚屋の眼鏡店主だ。

「魚屋さん、こんにちは。」

「おうナギサちゃん! 話は聞いてたぜ。それなら肉より魚が一番だぜ。」

「こらテメエー魚屋!」

「魚に含まれる成分は疲労回復には持つてこいなんだぜ? それに酒の共は魚つて相場が決まつてるんだぜ!」

何? そうなのですか?

確かにこの国の人間は他の人間どもと比べて魚を好むと聞いた事がある。もしかしたら西野さんも魚派かも……

「はあ? 何寝ぼけたことを! 肉がいいに決まつてる!」

「いいや! 魚だぜ!」

「あ、あの……二人とも喧嘩は止めて……」

「だところら!?!」

「だぜ!?!」

あ、駄目だ……聞いてないなこの人間ども。ホントに愚かだな。

しかし、一方でこの人間どもが いい物を勧めようと善意があるのは知っているので無下には出来ない。ナギサは人間的な判断で考えた。

仕方ない……他所で買うとしよう。

ここでどちらかを買うとまた喧嘩になりそうなのでこのすきに去る事にした。

「結局魚にしましたけど西野さんって肉派と魚派のどちらなのでしょうかね?」

買い物物の帰り道、西野さんが喜びそうな魚が手に入り少しウキウキなナギサ。もう既にこれから用意する料理で誉められる様子を想像している。

「えへへ〜♪」

彼女はただでさえ目立つこの深海棲艦特有の顔の歪み（本人は少し微笑んでいるだ

け)である。

「うわ……ナギサちゃんまた笑ってる？」

「なんか、怖いよね……ホントに笑顔なの？」

色々な意味で目立つ彼女の存在はもう商店街の住民にとって慣れたもので今ではさほど奇異な視線を集めていなかった。

だが、そんな中……

一つだけ他とは異なる視線が自分に向けられているのにナギサは気付いていた。

(またか……)

こここの所、これまで人間達から向けられたものとは違うまるで私を値踏みしているかのような視線を感じていた。

(これまででは無視をしていたが今日は少し仕掛けてみよう。)

ナギサは商店街を出てしばらくこれまで通り何も気にして無さそうに歩いた。

相変わらず視線、視線の主は等間隔で尾行しているようだ。おそらく私でなければ気がつかない位の完璧な尾行だった。

ナギサはいつもなら入らない路地裏に入った。

その後を追うように黒い影が路地裏に入った。

フードを被っており顔は見えない。

暗い小道の路地裏を音を立てずに進む追跡者……

しかし、この道はすぐに行き止まりとなった。

追跡者は明らかに戸惑った。

これまでこの道は一方通行で曲がる所なんてなかった。では先ほどまで追っていた彼女は一体どこへ……

そこで追跡者はようやく気がついた。

「ふふふふ……今さら気付いてもアナタの帰り道はもうないのよ!」

追跡者の後ろ……路地裏の入り口側にナギサはいた。ここは一方通行、つまり逃げ道はない! 追跡者は彼女に嵌められたのだ。

「さーて、私の事をつけてたみたいですが、アナタは何者ですか?」

ナギサは追跡者に尋ねたがおおよその見当はついていた。なのでナギサは艤装を展開する。

「まままま待つてください!」

いきなりの事に驚いた追跡者はついにそのフードを脱いだ。そこから表れたのは:

「なんだ、味方の方が……」

彼女をつけていたのは深海棲艦の重巡り級だった。これにナギサは安堵した表情で艤装を解除した。

彼女の推測はこうである。相手は既に自分が黒（深海棲艦）だと気付いて監視しているのではと。我々の人型は人間と大して見かけは変わらない。なのでこうも簡単に私

を見つけ出せるとしたらそれは同族、つまり味方が敵である艦娘どもぐらいたろう。
なので味方であつてよかつた……

「それで？ どうして私のことをつけてたのですか？」

「どうして、ですか？ それはこちらのセリフでございますよ姫様！ 心配しておりましたのですよ！ 姫様達強襲部隊が壊滅したと聞いて！」

「アナタは……もしかして……」

「はっ、はい！ 私は貴女様の直属部隊の後衛にいたものです！」

驚いた、まさか自分以外にも残っていたとは……

「後衛は無事だったというわけね。」

「はい、姫様のご指示通り奇襲に失敗を確認した時点で後衛及び支援部隊は転進をしました。ただ……姫様を見捨てて逃げる事に最後まで支援部隊の旗艦殿が反対なされました。」

アイツか……

「そう……でもならどうしてアナタはここにいるの？ 私の命令を聞かなかつた？」

「うっ……その点につきましましたは如何様にでも……」

「冗談よ。私の事を心配してくれたのでしょ？」

「はい！私は姫様は必ず生きていると信じておりました。」

私が生きていると信じたリ級は作戦終了後に部隊を離れて単身で戻ってきた。そして、あの浜で私の残骸を見つけた彼女は私が陸にいると確信し自分も揚がってきた。ちなみに、今着ている服は適当にそこから調達したとのことだ。

「姫様！帰りましょう！我ら配下一同は勿論のこと姫様方も貴女の安否を……」

「ごめんなさい……それはできません……」

「わかりました！では行きましょ……えっ？今なんと？」

「私のことはまだ誰にも伝えないで下さい。」

「……それはご命令でしょうか？」

「いえ、今の私に偉そうに命令できるわけないわ。だからこれはお願いよ。」

「……わかりました。」

「ありがとう。そしてごめんね。アナタの立場的には私の事を伝えないといけないのですね。」

ナギサは少し申し訳なかった。ホントは早く戻って部下や仲間を安心させるべきなのに。

「いえいえそんな！私は姫様の直属部隊でございます！なれば姫様のご意志に従うのは

道理でございます。」

「あ、でも流石にそれだと心配かけるから……総司令……はまずいから基地司令と古姫には伝えておいて。」

「あの方にはなんと?」

「アイツは……黙ってて。ばれたらうるさいから。」

「かしこまりました。では名残惜しですがさっそく……」

リ級は再びフードを被ると走り去っていく。

「さて……帰りますか。帰ったらさっそく料理してそして……うふふふふ。」

「それで?どうしてアナタはまだここにいるの?」

三日後

また買い物物の帰りにリ級に遭遇した。

「いや、それがですね。姫様のご指示通り基地司令にはお伝えしたのですが」
「あれ？古姫は？」

「あの方はオセアニアで豪海軍をボコってます。」

「そう、話の腰を折ってごめんなさい。続けて。」

「基地司令にお伝えしたまではよかったです。丁度総司令が来ておりまして話を聞か
れてしまいました。」

「……それで、総司令はなんて？私を連れ戻せとでも？」

「いえ、それが……」

『彼女がそう言うのなら好きにさせていいわ。』

「この事です。しかし、たまに生存確認と意見を聞きたいからと私に連絡役を命じまし
た。」

「ホッ。良かった。流石に総司令には逆らいたくなかったわ。」

「ただしあくまで黙認しているだけなのでくれぐれも他の者にはバレず面倒は起こすな
との事です。」

その後は今後どのようなようにして会うかなどやり級に街で活動する際の注意事項を確認させてその場は解散となった。

とりあえずは西野との生活を続けられる事に安堵しつつ、り級が何か問題を起こさないか不安なナギサだった。

第7話 やること無くて死にそうです

「〜♪」

朝食の後片付けをこのメイドが慣れた手つきで行っているとそろそろ出勤時間になった西野が着替えから出てきた。

「あ、西野さんお忘れものは？」

「え？ああ！それそれ！」

ナギサに指摘されて朝食時に確認していた資料を鞆に入れる。

この後は今日は多分遅くなるとかその日の予定を伝えられて玄関までお見送りをするのナギサの朝の日課だ。

「それじゃ後よろしく。」

「はい♪行ってらっしゃいませ西野さん。」

仕事に出掛ける西野さんを送り出すナギサの顔は常に笑顔だ。

その部屋を出てマンションの外へ出ると、

「おはようございます！」

「おわっ！びつくりした〜」

最近この辺りで見掛けるようになったスキンヘッドとピアスの柄の悪い二人の男だ。手にゴミ袋や箒を持っているのを見ると今朝も清掃をしているようだ。

「おはようございます……」

「お仕事ツスカ？頑張ってください。」

「それにしても兄貴、朝からの一仕事は気持ちいいですね！」

「そうだな。いい事をするのって気持ちいいよな。そろそろガキどもが登校する時間だ。いくぞ。」

「ああ！あれっすね！」

「おう、あれだ。グへへ〜」

何をする気なのか気になるが彼等が持っている黄色の旗が全てを物語っているので聞

かないことにする。

二人は掃除道具を片付けるとそそくさと去っていく。

(そう言えばナギサがうちに来たのと時期的に被るような……気のせいかな?)

ナギサに送り出され、元気のいい不良?に挨拶をされて驚きつつバス停に向かう。

これが西野さんの新しい朝だった。

「嗚呼、驚いた西野さんかわいいい〜♪」

西野さんを送り出した後ナギサは窓を拭いておりその一部始終を見ていた。

「キュキュつと〜♪はい、ピカピカです。さて、次は……」

窓を閉めて次の仕事は何かと辺りを見渡すナギサだが毎日掃除された部屋に汚れはおろかホコリ一つあるわけもなく綺麗だった。

「そう言えばする事ないから朝から窓拭きなんてしてたんだ……」

この後の仕事と言えば買物……買い置きしているのでしなくていいから晩ごはんを作るくらいだ。しかしそれまでは何もする事がない。

「暇ですね……」

ソファーに座りただじつとしている。

ただ時計の音しか鳴っておらずシーンとなる。

ここまで暇なのははじめてだ。これまでは仕事に不慣れだったり人間の常識を勉強したりで時間が余るなんてことはなかった。

つまり私は一人前のメイドになったと言うことですね！

ということはこの暇は熟練メイドへと至る者に課せられた試練と言うわけですね！
(そんなわけない)

よーっし！私は打ち勝ちますよ！

30分後……

「暇死にするくくく」

もう耐えられなかった。

溶けてソファアにこびりつきそう……

あ、そうなればソファアの掃除ができる……何言っているのだ自分は……

「西野さん……」

西野が帰って来るまで軽く後十時間もある。今のナギサには一年待てと言われているようなものだ。

「朝の西野さん、眼福だったな……」

朝の何気ないところであんなに素敵なのなら普段仕事をしている時等はどんなにカッコいいのだろうか。

「きつと、いえ絶対カッコいいに決まってる。」

一日の会えないほとんどの時間、あの人は何をしているのだろう。きつとそこには私の知らない西野さんが……

ピンポーン♪

「……誰です？人の妄想の邪魔をする人は。ハイ！」

と言いつつもしつかりメイドとして反応してしまうナギサである。暇をしていた体は喜んで玄関へと向かった。

「郵便ですか？て、アナタですか。」

「ハッ！失礼致します。」

やっ来て来たのはリ級だ。

「よくここがわかりましたね……」

「搜索は自分の得意分野でございます！」

「……まあ、立ち話は何ですし入って下さい。」

「それで？何かご用で？定期連絡は明日だった気がしますけど。」

「申し訳ありません。実は明日は別のよう：任務が入ってしまった為どうしても……」

「任務ですか。それは仕方ないですね。それでアナタが手に持っているそれは？」

「これですか、実はですね。今日はこれについて姫様からの意見を聞いて来いと言われまして。」

「何やら重装備ですね。新しい電探ですか？」

「いえ、これは開発群が新しく発明したハイド装置です。」

「ハイド？隠れるって意味かしら。」

「はい、なんでもそれを使えば特殊な電波が全身を覆います。するとステルス機能は勿論のこと、迷彩、それも完全に視界から消えるレベルのもので音や熱も探知されない完全に隠られる優れたものらしいです。」

「す、凄い！こんなの艦隊に配備できれば無敵じゃない！夜襲、強襲は絶対に成功するわ！」

「だと思つたのですが幾つか問題が……」

「何かしら？」

「まず装置制限です。少し重くて大型艦にしか装備できません。またかなりのエネルギー

ギーを消費しますから例え姫でも戦闘行為が行えませんが。」

「何それ致命的じゃないの。」

「はい、なので総司令から夜戦、強襲の専門家であるアナタ様の意見が聞きたいと。」

「え……」

大型艦にしか使えず装備している間は戦えないなんて、どう使えっていうのよ。戦闘目的以外、例えば偵察とか……

でも大型艦にそんな事をさせるなんて……

「試しに使ってみないと……これは私も使えるのかしら？」

「はい、姫クラスであれば誰でも使えるかと。」

「わかりました。少し試させていただけますので預かってもいいかしら？」

「もちろんです！どうぞ！」

ナギサはハイド装置を受けとる。

「次の定期連絡までに私からの意見をまとめさせてもらおうわ。」

「わかりました。では本日はこれにて。」

ナギサはり級が居なくなった後に試しに装置を装備してみた。

「確かに少し重いわ。イ級とかに着けたら沈みそうだわ。」

装備を起動し鏡を見てみる。

「凄い！自分が見えない！」

試しに色々ポーズを取るがどれだけ動いても見えない。

「これが人間とかに効果があるか試してみましようか？」

例え効果がなく見えてても私なら町を歩いてても問題ありませんね。

「早速お出かけです！」

暇で仕方のなかったメイドの元に突然舞い降りたオモチャ……はたして、その威力はいかなるものなのだろうか？

第8話 ナギサの社会見学

「いつも感じている視線がまったくくない。誰も私に気付いてないからなのかな？」

ハイド装置を試そうと人間が集まるところに行くことにしたナギサはいつも買い物に来る商店街に来ていた。

「あ、あのお肉屋さんだ。」

いつも声をかけてくる肉屋の元運動部の筋肉店主は奥から新しい品物を取り出していた。

「今回もいいの仕入れたな。流石は俺だ。」

「ホオウ、お前もいいの入れたみたいだな。」

肉屋に話しかけたのは向かいの魚屋の元文学部系の眼鏡店主である。

「なんだ魚屋か。」

「はは、悪いけど今日も俺が勝たせてもらうんだぜ。」

「何だとテメエ！昨日ナギサちゃんに買ってもらえたからって調子に乗るな！買ってもらった回数俺が勝つてんだ！」

「勝手に勝つなだぜ！4勝4敗17引き分けだぜ！」

「相変わらずこまけえなオイ！」

「褒め言葉だぜ。こっちは今日はなんといつもの半額でアジが入ったんだぜ。なんで今日はサービスで三匹買ってくれたら一匹分買ってやるんだぜ！」

「な、なんだとテメエ!?半額で本来一匹なのが二匹なのにさらに一匹お得だと！な、なんてお得なんだ!!」

確かに一匹分で二匹は得ですね。

しかし最後のサービスは……うち二人なので多いです。

魚屋は得意顔だ。だが肉屋も負けじと

「それなら俺だつて！これだ！」

「そ、それは!？」

「特上牛肉：：それも〇〇産だ。」

「な、なぜそんなものが！」

「おっとルートは教えられんな。コイツだな。こうだ！」

肉屋が紙にその肉の価格を書いていく。

「お、お前！正気か!？」

「大丈夫だ。元は取れてるから。俺はコイツで勝負だ!!」

「肉屋！俺の負けでいいから俺にも売ってくれだぜ!!」

「オメエには売らねよ！コイツはナギサちゃんが出来たときだけに店に置くんだけだ。」

「だぜ〜!!?」

何やってるんだこの人間どもは。

あ、でもあの肉は確かに良さそうだがいつも買っているやつに比べると高いな。なん

か面倒だから明日はスルーしようか。

「はあく疲れました〜」

その後も商店街を歩き回るが誰にも気付かれなかったナギサはマンションに帰りハイド装置を外した。その効力を確認したが帰ったとたんどつと疲れが来た。

「面白いですね。これなら潜入とかに使えるのでは？それも試してみたいですね。」

そうだ！

ナギサはいい事を思い付いた。

翌日

「それじゃあ行つてきます。」

「行つてらっしゃいませ♪」

今日も笑顔で西野さんを送り出すナギサ。そのまま部屋の奥に……は戻らず近くに隠しておいた装置を装備する。

「ハイド装置起動つと。」

装置を起動させたナギサは音を立てずに部屋を出て戸締まりをすると西野を追いかける。

「ハアハアハア……な、なんとか付いてこれた……」

なんとか西野さんを見つけたもののバスに乗られ危うく追跡不能になりかけたナギサは艤装を展開。

戦闘はできないものの展開した艤装の腕で発車したバスに掴まる。後は手を離さないよう気を付けること数十分……

「……が西野さんが働いているカイシャとか言う所ですか……」

ナギサが見上げるビルは総合ビルでありここの一画に西野の働く会社の支社が入っている。

「えへへ♪一度西野さんが仕事しているとこを見てみたかったから。これならば中に入れますしね。」

せつかくばれずに潜入できるのならば西野さんが見たいと考えてどこにあるのかは追尾して来るまでは成功だった。ところがバスから降りた所で人が多くなり、見えないナギサにぶつかりそうになる人間を気合いで避けながら追ってたらいつの間にか見失ってしまったのだ。

かろうじてここに入ったのは見えた。問題はどの階に西野さんがいるのかだが……

「しらみ潰しに探すまでです！」

それからナギサは各階を順に見て回り西野さんを探した。ところがなかなか見つからないのでただ探すだけでなく人間の仕事を見学しながらにした。

「おい！そつちはどうだ！」

「後少しで終わりです。終わったら手が空くのでそつちのヘルプ入ります。」

「おお！助かる」

「先輩！ここはどうすれば！」

「これはだな……」

忙しく作業しながら他人の手助けをする人間達ははまるで我が軍の駆逐艦どもを彷彿させるいい働きぶりだと思った。

駆逐艦達は多様で大量の仕事をこなす働き者で、弱いけどそれを数や連携で補う。

私は駆逐艦は部下としては好きな方だ。姫ではあるが軽巡洋艦。駆逐艦を統率する立場であるからその仕事を嫌でも見てきているからだ。

そう思うと愚かだと思つてた人間どもも少しは可愛く……

「おい、例の計画は？」

「はい、業者によれば五年後に完成するとのことですよ。」

「ご、五年ですって!?!確かに我々と艦娘の戦いは膠着しているが今は仮にも戦時ですよ！いつ人間が減ぼされるか、来年にはこの国が無くなつてるかも知れないのにそんな未来の事を考えるなんて！」

なんて呑気な……

「あ、そういえば。最近深海棲艦からシーレーンが解放されたお陰で資材が入りやすくなったのでもしかしたら早まるかもだそうです。」

「おっそれはいいな。鎮守府と艦娘様々だな！」

ぐぬぬぬぬぬ！それは数ヶ月前に南西海域での戦いで友軍が敗北したからです。でも見てなさい！その内すぐに取り返すから！

やっぱり人間は嫌いです!!

次の階からはさっきの会社とは別の会社が入っているようです。

「ハアハア……この装置燃費が悪いです。」

大分エネルギーを消費してしまっている。そろそろ西野さんを見つけないとこころです。

「うん？あれは……」

目の前から歩いて来ているのは西野さんの同僚の東田さんです。彼女がいると言う

ことは……

ここに西野さんがいる！

そうとわかれば西野さんのところまで後わずか、このまままっしぐらです！

とそのまま東田の横を通りすぎようとした時だった。

「あれ？何かいる。」

私はぎよつとなり動きを止めた。

(えっ？まさかね……)

「ううんと……そこかな。」ギユ

東田に肩を掴まれた。

「ひい!？」

思わず声が漏れた。

「あ、やっぱりいた。ここは不味いから少し場所変えよ。」

そのまま東田さんに捕まって私はその階の一番隅、給湯室なる場所に連れて来られ

た。

「ナギサちゃんでしょ？もう姿を見せてもいいよ。」

「………なんで分かったのですか？」

「うくん、気と言いか気配かな？」

け、気配って……

「ふ、ふーん。人間さんは皆そんな芸当ができるのですか？」

「いや、多分無理だね。でも私とかそこそこやってた人ならできるんじゃないの？」

「やってたって何をしたんですかアナタは……」

「ナギサちゃん、それは秘密よ。女性は少し秘密があつた方が魅力的でしょう？それに芸当云々ならアナタのそれこそ凄いじゃない。それも深海棲艦だから？」

「いえ、それは試作品です。てか、なんで私の正体を？」

「え？西野さんから聞いてるからよ。それでそんな試作品なんか使つてなんでここに？」

「そ、それは……」

「目的は西野さんかしら？」

「はい……カアアアア」

「うくん、ばれたら困るのなら止めた方がいいわよ。彼女、私より気配察知の索敵範囲が

広いからすぐにバレるわよ。」

「……本当にあなた方は何者なのですか？」

「ふふふ、今はしがない会社員よ。姿が見たいならばれない位置まで連れてくわよ。」

「本当ですか！ありがとうございます。」

東田さんに案内されて東田さんのデスクまで来る。そこから私はついに西野さんを見る事ができた。

「嗚呼！黙々と仕事する西野さん素敵……」

「アナタ、ホントに西野さんの事好きだね。声が漏れてるよ。」

「おっと、すいません。」

この装置、防音とか言ってたけど私の声音は出ているようだ。

そのまま東田さんの所から西野さんを眺めていると何やら男が西野さんの所に向かっていた。

「東田さん、あの人は？」

「うん？ああ……あの人はここの所長だよ。」

「所長さん？」

彼が西野さんの所に行くところからでも聞こえるボリュームで

「コラッ西野!!」

西野さんに怒鳴りつける声が聞こえた。

「クロス……」

「待つて待つてナギサちゃんストップ!」

東田は必死に所長を始末しようとするナギサを押さえる。

その間、西野さんは所長にペコペコ謝ってた。

隣の席でひそひそ話をする男達の声が聞こえた。

「また所長だよ。全く西野ちゃんもヤバイ人に目をつけられたな。」

「新人なのに仕事ができるからな……どうせまた有りもしないいちやもんでも付けて自分の仕事をさせるのだろう。」

「絶対に殺す……」

「待つて! ナギサちゃん! それは私も思ってるけどそれだけは不味いから!」

ひとしきり怒鳴ると所長は去っていく。後に残されたのは死んだ顔をした西野さんだけである。

「私あんな西野さんを見たくありません！」

「私もよ……その為にはあの所長をどうにかしないと……あ、そうだ！」

「何ですか？やはり殺しますか？」

「殺人はN.Oで。透明のナギサちゃんにしかできない頼みがあるんだけど。それで所長を……から消せるから。」

「……何をすればいいですか。」

数日後……

「うっは〜♪今日のお酒は美味しい！」

「今日のご機嫌ですね。何かありましたか？」

「それがね。私の働いてる会社の所長がクビになったんだ。」

「へ、へえ〜。その人何かしたんですか？」

「あの人、私とか部下のパワハラだけじゃなくて支社のお金勝手に使ったりだとか色々

出てきちやっただって。誰かが証拠を掴んで本社に報告したらしいの。」

「パワハラってなんですか？まあでも西野さんがそれで嬉しいのなら私も嬉しいです。」

「うん、これであの所長を見なくて済むから私もう幸せ〜」

うんうん。西野さんは笑顔でなければ。

それにしても。東田さんに言われた通りの物をあの男の部屋から探して渡したけど。これはどういうカラクリなのでしょう？

「今日は奮発したいいいお肉があるのでたんとお召し上がり下さい。」

「わーい♪」

さてさて、私も報告しないといけませんね。

「やはりダメでしたか。」

次の定期連絡で私はリ級にハイド装置の意見を述べた。

「ええ、使ってみただけどエネルギーの消費が酷く防音にも不備がありました。」

「まあこれは今回だけの開発で出来が良ければ量産との話でしたしね。ではこれは廃案

で決まりです。」

「ええ、お疲れ様です。ところで……」

「なんででしょうか？」

「アナタこうも行ったり来たり大変では？」

「あはは、これも任務ですから。それに人間に紛れるのも少し楽しいですし。」

そう言うとり級は去っていく。

「あ、り級装置忘れて……まあ私が持つておきましょう。」

また使いそうだし。

それにしても。り級の服装、前のぼろぼろフードとうって変わって可愛くなつてた気が……

「泥棒とかしてなきやだけど……」

深夜のコンビニの話

ナギサ達の暮らす街は現在深夜。

いつも賑やかな商店街は眠り、明かりがつくのは街灯やコンビニのみである。
そんな灯りの一つ、とあるコンビニの話である。

「ありがとうございますました〜」

深夜のコンビニ、マニュアル通りの接客でレジを回す彼は今年進学を期に一人暮らしを始めた大学生。

名を南波と言う。

彼がバイトをしているのは別に金銭に困っているからではない。そりやお小遣いを増やせていいとは思っている。

彼は空いた時間をほぼこのバイトに使っている。部やサークルに所属していない

のだ。別に関心が無いわけでも能力がないから入っていないわけでもない。

この男これでも元は運動部の主将を務めていた実力者、当然スカウトされたがそれを蹴ったのだ。

違う事をやりたかったと言うのもあるがそれなら別のサークルにでも入れば友達もできたし思い出も作れるだろう。しかし、それすらしなかった。

では、金の為でもなく、わざわざ楽しいサークル生活を捨ててまで深夜のコンビニと言う人気バイトランキングの最下位を争える所で働いているのか？

「うぐぐつー！」

店長が商品の補充の為かダンボールを運んでいた。しかし、そろそろ定年間近の老体には商品の詰まったダンボールを運ぶのは酷だろう。

「店長、俺が運びますから少し休んで下さい。」

「すまないね南波君。」

店長に代わってダンボールを運ぶ南波。スポーツをしていたので体格の良い彼はダ

ンボールを軽々持ち上げる。

「これ、補充ですか？」

「いや、さつき届いた追加の在庫だよ。まだたくさんあるんだ。」

外にはダンボールの山が……

いや、業者。どうせなら中に運んでくれよ。

「はあ……やるか。」

南波はダンボールを店内の倉庫に運び入れる。店長にやらせるより自分がやったほうが早いだろう。しかし、少し数が多いな。と、思っていた時だ。

「南波君、手伝う。」

「おう。ありがとう六花さん。」

もう一人のアルバイトである女性が手伝いを申し出てくれた。

店長が持てない物をこんな少女に持てるとは誰も思わないだろう。しかし、彼女は

「よいしょー！」

南波が1つ1つ運んでいたものを一気に2つ持ち上げた。六花の協力もありダンボールはすぐに無くなった。

「助かったよ。」

「ううん、いいの。」

そう言うのと彼女は店の奥に戻った。実はこの店の売上計算や経理など全てやりやつてるのだ。

「あれ店長の仕事だろ？」

「いや、私より早くて正確で助かるよ。」

オイ店長！

荷運びなんてやったが基本的に深夜に客なんて来ない。なので店の奥の休憩室で店長とかと雑談することの方が多い。

そんな俺らが喋ってる横で黙々と計算している六花さん。それを横目で、バレないよに眺めるのが彼の楽しみだ。

六花にはバレてないが……

（あ、南波君今日も六花さんを眺めてる。若いね〜）

店長にはバレていた。

「……」 カツカツカツ

「……」 じー

「……」 にやにやゝ

休憩室にしばしの沈黙タイムがやって来る。

そして、いつも決まってこの沈黙タイムは、

「店長、終わりました。」

「おわっ!」

南波は慌てて目をそらす。

「?南波君どうかしたの?」

「い、いや? なななんでも?」

「クスクス、六花さん相変わらず早いねゝ」

「はい、では約束の……」

「うん。いつもの所に置いてるから好きだけ持ってつてよ。」

「ありがとうございます♪」きらきら☆

この瞬間がいつも表情が変わらない彼女が一番笑顔になる瞬間だ。なので南波は見逃さない。

「♪」

六花はいつもの所へと向かった。

「なあ店長。」

「なんだい南波君。」

「確か六花さんが経理をやる見返りって」

「うん。売れ残りと期限切れとかで廃棄するお菓子を好きだけあげる事だよ。」

「前から思ってたけどそれってどうなんですか？」

「彼女自身の提案だからね。まあ……食べ物捨てずに済むから私は有難いけどね。」

そんな話をしていると廃棄予定の期間限定販売のお菓子の売れ残りを抱えた六花さんが帰って来た。

「店长、これだけいただきます。」

「うん。いいよ。今南波君にも言われたけどそんな物でいいのかい？」

「はい。私、お菓子好きなので……それをこんなに沢山タダでもらえるので……」

少し恥ずかしそうに答える。

「それではそろそろ交代の時間なので。」

「うん？ ああそうだね。そろそろ次のシフトの子達が来るね。南波君ももう上がってい

いよ。」

「はい。」

「私着替えます。」

六花は再び退室した。

「ところで南波君。君もシフトは今のままでいいのかい？」

「はい！ 問題ありません。」

「どう言うわけか六花さんは深夜のこのシフトしか入れてないようだからな。」

「このまま六花さんと同じシフトで大丈夫です！」

「そ、そうかい。」

六花さんもそうだけど。この子も大概だね。
ま、見てる分には楽しいからいつか。

「ふあゝ。帰ったら速攻寝ないと講義遅刻だ。」

「南波君。お疲れ様です。」

「六花さんもお疲れ。毎度のことだけど夜道一人で大丈夫、送るけど？」

「ええ。大丈夫。私の家少し遠いから南波君に悪い。」

「そっか。なら仕方ない。」

「フフ気遣いありがと。それじゃまた明日の夜。」

「おう。じゃあな。」

帰る六花を見送る南波。

「また明日の夜か……。よし。今日も頑張つて寝るか。」

南波は今日も嬉しそうに夜道を帰った。

たまたにシフトを外す彼女がまた明日と言っていた。これで明日は間違いないと彼女と働けるなど。

「ふう。」

海辺のもう誰にも使われていない倉庫群。

その内の一つに周りに誰もいないのを確認してから六花、いやり級は入った。

倉庫の中は少し片付けられていて廃材から作られた家具のようなものが置かれていた。

誰も来ないここを彼女は陸地にいるときの隠れ家に使っていた。

姫に指摘されたが陸地で活動するにはなるべく変装、そのための服が必要で資金が要った。

深夜にしかバイトを入れていないのはなるべく人目につかないため。そして、コンビニで働く理由は。

「この新作おいし〜」

食糧もといお菓子にありつく為だった。

当初は深夜で働ける場所を求めての選択だったが、ある日、店長が何気なく差し入れたお菓子を食べてからだ。

(ウマイ!!?)

口には出さなかった。出ないように堪えた。その時は平静を装ったがそれでもこの衝撃はまるで魚雷がぶつかるのと同等以上のモノを彼女に感じさせたのだった。

服も買い、資金集めの必要が無くなったのにもかかわらずあそこで働き続けているのは全て……

チヨコのような嗜好品は姫様にしか味わえない貴重なもの。けれどここでなら沢山手にはいる……

「ウフフフ……♪」

次の定期連絡はまだ先、もうしばらくは連続でシフトを入れられるなとり級は思ったのだった。

第9話 突然の訪日の目標はお姉さん？

西南航路 深海前線基地

西方の航路を塞ぐ形に展開する深海棲艦の拠点の1つである。ナギサの所属する艦隊はここを基点に南の島々を支配している。

元々は後方の基地だったが戦線を押し上げられて前線基地の分類になってしまった。

この日はナギサの事を基地司令と南方方面司令に報告する為にり級が訪れていた。

「いや〜。ここはいつ来てもものしいですね。」

南西航路封鎖の最大にして最終の防衛ラインだけあり、通常は一人でいたら凄鬼、姫クラスが何人もいる。その配下の艦隊も日本近海にいた奴らとは比較にならない性能の精鋭だ。

抜けるものなら抜いて見る艦娘ども！

「止まれ。所属と用件を。」

司令達がいる深部に近づくとつれて警備がきつくなる。

「南方方面独立強襲群のものです。基地司令に報告を。」

「独立強襲群？あの壊滅した……」

「それ以上言ったら直衛だろうと容赦しないで。」

「……も、申し訳ない。」

「わかってくれれば良いです。」

「姫様に取り次ぐので少しお待ち……」

「いえ、許可があるのでこのまま行きます。」

「え、しかし……」

「細かいところはいいから……仕事熱心でいいけどこれでも食べて休んでて。」

り級は直衛の手を握りその手にあるものを握らせる。

「は、これ!？」

その手にはチョコレートがあった。

「よよよよろしいので!？」

「うん。バレないうちに食べてね♪」

「はい！エヘヘ♪」

直衛はその場を離れた。本当にバレないように食べに行ったのだ。

「はい、人払い完了。やっぱり賄賂に使えるね。」

いつくか持つて来て正解ですね。

姫のいる施設は入り口の直衛以外基本誰もいない。誰にも会うことなく姫のいる部屋に到着した。

「基地司令、私です。」

「リ級？人払いは？」

「出来てます。おそらく後一時間は戻らないです。」

「そう……入って。」

ガチャ

「失礼致します。」

一礼して中に入る。

中に待っていたのはこのボスである基地司令、港湾棲姫だった。

「全く。毎回どうやって仕事に忠実な直衛を行かせているの？」

「あはは……ノーコメントで……」

「もう……まあ知っていますからいいけれど。」

流石にこの人にはバレてたか。

「それで？軽巡棲姫は元気がしら？」

「はい。それはもちろん。」

リ級はナギサからの伝言やその他の観察報告を行った。一通り話し終えた辺りで姫はふとした事を聞いた。

「確か、向こうではナギサって名乗って人間と一緒になのよね？何か人間についてわかったことはあるかしら？」

「はい。姫様によると人間は我が軍の駆逐艦並みの働き者と称しております。ただ樂觀思考が強く救いがたい点も確認できたとか。」

「ふーん。後者は分かりきったことよね。でも前者は初耳だわ。そのままでもいいから何か分かり次第伝えるように伝えてちょうだい。」

「かしこまりました。」

「それと。」

「まだ何か？」

「次は賄賂だけでなく私と南方司令にもお土産を期待してますよ。私はともかく南方司令はカンカンですよ。最近直衛達が自分より甘そうなモノを食べてるって。」

「は、はい！分かりました！」

「これはもうしばらくバイトをする口実ができた。」

「他に報告がなければ行つていいわよ。」

「で、では。失礼しました。」

「用は済んだか？」

「ええ。引き続き仕事頑張つて下さい。」

り級が出る頃には直衛は戻つて来ていた。少し口元に茶色いものがついたままなのに気づいた。

「(ト)。(ト)。」

バレて他の艦にしばかれるのも可哀想なのでり級は教えて上げた。

「あつ！これはこれは……」

直衛はお辞儀をして口元を拭いた。

「さてと、では潜入に戻りますか。」

「あら？そこのリ級ちよつと。」

「?……私でしようか?」

突然後ろから呼び止められた。

振り返り見てみると彼女を呼び止めたのは黒一色の和服に身を包んだ姫クラスの少女だった。

「やっぱり、アナタは姉様のところのリ級でしょ!」

「あああ!これは駆逐古姫様!確か豪州にいたのでは?」

「うん。粉々にしてきた。」

「流石ですね。」

「そんな事より!姉様は!姉様の部隊が壊滅したって聞いたけど嘘だよね!」

あ、そういえば古姫様には伝え損ねてた。

「古姫様、ご安心下さい。」

「何を安心したらいいの! 姉様が! 姉様が!」

「お、落ち着いてぐほっ!」

少し取り乱し始めた古姫の拳がリ級にヒットした。

「あ! ごめん……」

「い、いえ……お気になさらず……ここだけの話です……姫様はご健在です。」

「!! ホントに! ホントにホントなの!」

「はい、私はこれから姫様に定期連絡……おわっ!」

「どこ!?! 姉様はどこなの!!」

「ひ、姫様は……です……」

「そこに姉様が……私、行く!」

「あ! 古姫様危険です! せめて私と一緒に……行っちゃった……ど、どうしよう……」

「と、言う事がありました。古姫様が行方不明です。」

「……色々突っ込みたいけどまずは前置きが長い！」

定期連絡でいつもの路地でリ級とナギサは会った。どうやらナギサの所にまだ駆逐古姫は現れていないようだ。

「まさかそんなに心配をかけてたなんて……」

「ど、どうしましょう……古姫様に何かあれば、私！基地司令達に殺されます！」

「はあ……とりあえずアナタは戻って下さい。彼女の搜索は私がしますので。」

「しかし姫様。」

「私の方がここに詳しいですし、私の所に現れる可能性が高いので。」

「……分かりました。」

とりあえずここでリ級と別れた。

「さてと、まずはこの買い物袋を置いてから探しに行きますか。」

今日は休日ですので西野さんが家にいます。なので今日はいつもより夕食の時間が早いのであまり時間がありませんね。

「はあ……全くあの子はどこにいるのやら。」

一方その頃……

「ぎゃあああああ!!」

「あ、兄貴!」

人気のない公園で不良の二人が子供を襲っている……のではなく、一方的に打ちのめされていた。

本当に彼はその少女に何かするつもりはなかった。

ただこんな人気のない公園で一人でいてキョロキョロしてたのを見て迷子か何かと心配して声をかけたら次の瞬間子が吹き飛ばされて、兄貴にキツイ一撃が入っていた。

少女は倒れた兄貴の元に寄り、

「あの……この辺りで顔が隠れてる女の人見ませんでした？」

丁寧に見てきた。

「あ」

「あ？」

「あ、あああそこです。」

不良が指したのは西野宅のある建物だった。

「あれですか。ありがとうございます。」ペコリ

少女は不良達にお辞儀をすると真っ直ぐそこに向かっていった。

「あ、兄貴。大丈夫ですか？」

「俺……もう女が怖いかも……」



「あ〜♪幸せ〜♪」

久しぶりのフル休日を満喫した西野はソファで横になりこれまで読めずにいた本を一气読みしていた。

そんな日頃お疲れな彼女の為といつも以上にナギサからの良くして貰った彼女は最高の休日を謳歌したのだった。

「あ、もうこんな時間！こんなに本を読んだのは久しぶりだね。ナギサは……買い物かな？」

流石にそろそろ一息入れようと本に葉を入れた辺りだった。

ピンポーン♪

「あれ？何だろう。東田さんは……忙しいはずだから来ないし、宅配便かな？はい！」
とりあえず出てみるか。

「はい。つてあれ？」

扉を開けても誰も立っていない。いや、少し視線を下げると見覚えのない女の子が立っていた。

「ええつと……どちら様？」

「カエセ……」

「えっ？今なんて……」

「姉様を返して！」

西野に黒衣の少女が襲いかかった。

第10話 第2の深海棲艦

前回のあらすじ

何故か和服少女が西野に襲いかかった。

「えっ!?!ちよっと!」

何の冗談かと思つたが彼女は艤装を展開!殺意が漏れ伝わる。それに気づいた西野は最初の一撃をなんとかかわす。

(不味い本気だ!)

とつさに部屋の奥に逃げ込んだ。少女は西野を追つて中に入る。しかし、西野はどこにもいない。

「どっ!」

少女はキョロキョロ辺りを探る。

そして、後ろ、いや、上から気配を感じた。

「ちえー！バレた！」

上の隅に蜘蛛のように張り付いていた。

少女は艤装から砲撃を放とうとする。しかし……

「よつと！」

「!？」

西野は自分から降りてきた。と思ったら消えた。

「早い！」

ものすごい身のこなしだった。

「ごめんね！」

いつの間にか西野は自分の後ろを取っていた。手刀で少女を気絶させようとした。できれば傷付けず無力化させたいところがだった。しかし、

「ふん！」

少女もまた動きがよい。すぐさま艤装の腕で防御！防がれた西野は飛び退いて距離を置く。

「イツツ……硬いな……」

「はああー！」

少女の艦装による連続打撃攻撃！人がまともに食らえば骨が折れるだろう。

ところが、それを西野は受ける。正確には少女の打撃を巧みにいなしていく！

「ここまで攻防が続いて流石に二人の息が上がる。再び距離を置き呼吸を整える。

「私の攻撃・素手で防がれたのはじめて！」

「私も！こんなに重くてしんどいのを連続で受けたのはじめて！」

今はなんとか西野が防いでいるので膠着状態。しかし、やはり深海棲艦の力の強さ、体力が相手では西野の体力は長くは持たない。

（くっ！最近運動なんてしてないよ。呼吸がキツイ。そろそろ手も痺れてきたよ……。不味いね。）

相手も動きがよくてあの腕は攻守ともにとんでもない。このままだといつか殺られるよね……

よーし……一か八か……

「はっー！」

少女は呼吸を整えてた少女が再び連続攻撃に出てきた。おそらくこちらの体力の限界を見透かされたのだろう。

好都合だ。

西野は先程のように少女の腕をいなすのではなく、腕を脇に通しそして根の部分を締めめる。

「!?」

そのまま相手の足を払い柔道の要領で相手を投げる。

「きゃっー!」

床に投げつけられはしたが少女にダメージはない。しかし、何をされたのか分からず少し困惑した隙を見逃さない。

彼女の腕を抑えそのまま組み伏せた。

流石にこの姿勢では力が入らない。いくら暴れても西野の拘束は解けなかった。

「流石に艦娘で柔道とかしかけてくる人はいなかったみたいだね。ねえ、君もしかして深海棲艦?」

「っ?!?!」

「その顔は何でバレたのって顔だね。前に一度だけナギサに見せて貰った事があるけどその装備が君のと似てた。」

「ナギサ……姉様のことね。」

「姉様？」

「人間！姉様を解放して！襲ったことは謝るしなんなら私を好きにしていから！」

「え、ええ!?ちよつと待って。話が読めないけど。」

「アナタが姉様を拐かしたのでしよう!!だから姉様は帰って来ない。」

「あ……」

「この子、ナギサの知り合いか……」

「で、私がナギサをって考えたのか。うーん、私が原因なのはあながち間違いではないのだから否定はできない。」

「けれど……」

「拐かしたはちよつと酷くない？」

「うるさい！姉様は！姉様はどこなの！」

「ナギサなら……」

「あの……扉が開きつぱなしですが何かあったのですか………本当に何かあったので

すか?」

「ナギサ、ナイスタイミング。」

「姉様♪」

ナギサの説得で少女が大人しくなったところでまずは自己紹介からはじまった。

「彼女は駆逐古姫、私達は古姫って呼んでます。そして、古姫、こちらは西野さん。私の命の恩人で今はご主人様です。」

「どうも……ペこり」

「彼女は私の……そうですね。妹分のようなものです。」

「ああ、だから姉様なのね。」

「それで古姫、どうしてここに?」

「姉様の部隊が壊滅して姉様が行方不明になったって聞いて、それで生きてるって聞いたらいっても立ってもいられなくて。」

「それでアナタまで行方を晦ましちや駄目でしょう。リ級が探してましたよ。」

「ごめんなさい……」

「まあまあ、その子はナギサの事を思つて来たんだしね。その辺にしてあげて。」

「そうですね。心配をかけてごめんなさい古姫。」

「姉様……」うるうる

「それはそうと、古姫？アナタ、西野に危害を加えたみたいですね？その件に関してこれからお説教です。」

「ひいひい！」

あ、ナギサの顔がガチだ。助けるか……

「いや、私は気にしないよ。死んでないし。」

「それでも！普通なら死んでますよ！と言うか流石西野さん古姫に襲われて無事だなんて凄いですね。」

「うん西野凄い！私、人間に投げられたのはじめて！」

あれ？私、人間じゃない子達に不思議がられてる？

「……ほん、それはそうと。」

「あ、反らした。」

「古姫ちゃんは今からどうするの？」

「そうですね。古姫も艦隊を任されてることですし、帰した方が……」

「私……姉様と一緒にいたい。」

「ですけど西野さんの事情も……」

「え？いいよ。」

「いいんですか！私の時は悩んだのに！」

「いや、もう一人住ませてるから同じかなと。それに、こんなに姉思いの子を引き剥がすのは可哀想だしね。」

「西野！ありがとう！」

古姫は西野に抱きついた。

まさか少し前に殺されかけた相手に懐かれるとは。

「と、言うわけだけど。一人住人が増えるけどいいかな、我が家のメイドさん？」

「……もう、料理の一人分追加ぐらいどうと言ったことありません！」

「今から三人分でも？」

「もちろん。お任せください。」

「おお、流石。」

「料理？姉様が？」

「はい。私はこれでも」

今度はナギサが西野の抱きつく。

「西野のメイドですもの。」

この晩はナギサの料理を堪能した古姫が興奮したりと楽しい食卓となった。

そして、翌日

「あ……体がキツイ……筋肉痛……」

キツそうにデスクにうつ伏せる西野。それを見かねて東田がやって来た。

「西野さん、今日月曜日だよ。休日何してたの？」

「あはは……色々あってね……」

「湿布持ってるけどいる？」

「東田さん神々♪」

「と、言うわけで古姫はウチで預かります。」

ナギサはリ級に古姫が見つかったとことその後の経緯を伝えた。

「そうですか。実は南方司令からの伝言で」

『もしアイツが軽巡棲姫と出会ってたらもうアイツの好きにさせておけ。』

「だそうです。」

「あの方がそんな事を……」

「古姫様は十分戦果を出しておられますし、艦隊は解体して余剰戦力を基地防衛に当たたいとの事です。」

「そんなに切羽詰まってるの？」

「いえ、しばらくこちらからは仕掛けないで様子を見るとかで実働部隊を減らしているとか。」

「これはしばらくにらみ合いですかね。」

「そうだと思います。では私はこれで。」

「はい、司令達によりしく伝えて下さい。」

第11話 古姫の眺めてるもの

同居人が増えて数週間ほどが経ちました。

ナギサに教えられてこっちの常識を覚えた古姫ちゃんは全くトラブルを起こしていない。(もしかするとナギサよりいい子かも)

それどころか仕事から帰って来ると

「西野♪お帰り〜♪」

玄関で待っていてくれてすりよってくるのだ。

その可愛いのが何の。1日の仕事の疲れを忘れさせてくれて……。はあく子供がいたらこんなかな。

ただ、一つ問題があるとすれば古姫ちゃんが私にべったりなのを見るといつもナギサが焼きもちを焼いてはくつついてくるのだ。

いや、悪くは無いのだが……

一応疲れてるんだから二人にくつかれると動けなくて……ああ、待つて！倒れる！

と、この日も西野は倒れた。

「西野さん!？」

「西野が倒れた!」

そして、いつも決まって二人とも慌てるのだ。

以上、私の最近の悩みを会社で東田さんにして見ましたところ。

「いいな。私も同居人欲しいな。」

「いやこれが両手に花はなかなかキツくて……」

「このひとでなし！私だって癒しが欲しい！課金して手に入るならいくらでも課金する
！」

「ほほう？東田さん欲求不満ですか？なら今晚飲みに行く？」

「うーん。それは素敵な提案だけど止めとく。私が西野さん取っちゃったらその二人に

狙われそうだから。」

「あつはは。東田さんなら返り討ちにしようだけどね。」

「ジョーダンを。その古姫ちゃん、西野さんでも殺られかけたんでしょ？私じゃ殺されるわよ。」

「そうかな？運動不足の私と違い今も体を動かしている東田さんの方がまだやれると思っけどね。」

「あ、古姫と言えば。」

「どうかしたの？」

「最近、朝にベランダからよく外を眺めてるの。何を見てるんだろう？」

「朝日とか？」

「私が出る前とかだから7、8時だよ？それに雨の日も見てるし。」

「それは確かに何を見てるのやら。なんなら西野さんも見てみれば？古姫ちゃんが見てる時に。」

「なるほどその手があつたか。」

「いや、最初に気付いてよ。」

「いや〜いつも出社ギリギリで……」

翌朝

「じー……」

今日も古姫は外を眺めていた。

「ふふ、今日も飽きませぬね。」

「ナギサ、あの子が何してるか知ってるの？」

「え？あの家の前を掃除しているスキンヘッドを見てるのでは？」

「え？」

私は急いで古姫の隣から下を見ると

「あ！ハゲの人！おはようございます！」

「おいこら！兄貴はハゲじゃねえぞ。」

「がははっ！気にせんで。今日もがんばれよガキども。」

「はーい！」

確かに今日もほうきを手には掃除をしながら登校している学生に挨拶しているあの不

良達の姿が……

「……ねえ古姫ちゃん。」

「何〜西野？」

「毎朝何を見てるの……まさかスキン……」

「あの服の人間達を見てた。」

古姫が指を指したのはスキンヘッドではなく、スキンヘッド達が挨拶をしている登校中の学生達だ。

「あれは……近くの中学校の制服だね。」

「西野、学校って？」

「学校って言うってね、えーと、勉強を教わる所だよ。」

「西野も行ったことあるの？」

「うん、だいぶ昔に。」

「えっ！つまり学生服姿の西野さんが存在していたと!?見たいです！」

ナギサがなぜか興奮した。

「残念、私の学生時代の写真は全部実家です。」

「えー。」

「あの服、学生服って言うの……ふふ。」

あら、この子がずつと何を見てたのかわかった。

「学生服、来てみたいの？」

びくっ！

「ビンゴかな。」

「う、うん。かわいいから来てみたい、かな。」

「そうですか？ 私は艦娘どもみたいな服装であまり好きじゃありませんよ。」

「おいこら、私の学生服姿見たいと言ったのは誰だよ。」

「もちろん西野さんは別ですよ。」

「着たいのもだけど、その……」

「学校、行ってみたいの？」

「……うん。」

この子、ナギサよりも常識覚えるの早かったし、もしかすると人間の暮らしに興味があるのかな？

「うん、いいよ。」

「え？今なんて……」

「学校、行ってもいいよ。」

「ホントに？西野大好きー♪」

「おっと、いきなり飛び付かないで！」

「えへへ〜♪」

「西野さん、古姫の為にしてくれるのは私も嬉しいのですがお金は大丈夫ですか？」

「大丈夫。実はあの中学校の制服持ってる。」

「……なぜか別の意味で大丈夫じゃない気が。」

「待って！私のじゃない！前に東田さんが資料用とかで買っていていらなくなったのを押し付けられたからよ！」

西野は咳払いをした。

「まあ、古姫ちゃんを学校行かせるとなると戸籍を作ったり道具揃えたりと色々やんな
いといけないからすぐには無理だけど。」

「うん！わかった。その間、学校行っても大丈夫なよう自習してる！」
「うん、頑張ってるね。じゃ私は遅刻しそうだからそろそろいくね！」

西野は走った。次のバスに乗り遅れたら遅刻だ。

「と、言うことで古姫ちゃんを学校に行かせます。」

「いいないいな、メイドの次はリアル学生だなんて。ズルい！」

「はいはい、東田さんから貰った制服着ていくからそれで我慢して。」

「あら、私のあげたやつを使うの？」

「ええ、おかげで私が危ない人って勘違いされかけたけどね。」

「ふふ、使ってくれるなら嬉しいわ。でもできれば私は西野さんが着てるのを見たかったけど。」

「誰が……まったく。」

「ええ？だって西野さんの学生時代可愛いもん。ほら！こんなに制服も似合ってるし。」

「会社に私の昔の写真なんて持ってこないで!!」

第12話 古姫の学校デビュー!の前に問題発生

「通学カバンも買ったし……準備万端だね。」

「もう行けるの?」

古姫が学校に行きたいと言い出して早くも一週間が経過した。

西野はその週の休みを返上して必要な物を買って揃えた。

「いや、書類の都合上古姫が学生になるのは2週間後かな?」

「そっか……しゅん」

まだ待たなければならぬので少し落ち込む古姫。その頭を西野はゆっくり撫でた。

「まあそれまではいきなり転入しても置いていかれない様に勉強でも教えてあげるから。」

「うん♪」

「……。」

「うん？どうしたのナギサ。そんな顔をして？」

「いや……色々ツッコミたいのですが……学校って小中って順番あるのにいきなり中学に入れるものなのですか？いや、それ以前に入るための書類もそうですがその為の戸籍とかなんとかは一体……」

「ああ、それなら一昨日くらいに東田さんがなんとかしてくれましたよ？」

「え？なんとか？」

「うん、なんかこれくらいなら朝飯前だつて。」

確かに、偽装書類やその手の工作なら彼女の得意中の得意だろう。その気になれば一晩でこなせるだろう。

「飛び級に関して古姫は海外から来たつて事にするから問題ないよ。」

「こんなご時世に海外からね……」

「アナタがそれを言う？」

「全く…古姫ったら。」

あまりにも嬉しかったのかカバンと一緒に寝てしまった。西野さんも今日の買い物で休めなかったからか夕食の後すぐにお休みになった。

「さてと……」

ナギサは二人がよく眠っているのを確認すると音を立てずに部屋を後にした。

彼女が向かったのは前にリ級を追い詰めたあの路地裏だ。

ナギサが来ると奥からすつと黒い影が出てくる。

「こんな夜中になにかしら?リ級?」

「夜分に申し訳ありません。しかし、我々が人目を避ける意味では闇夜に隠れるのが宜

しいかと。夜戦が専門の我々ならこのくらいで十分かと。」

「そうね。ただ、早く終わらせてね。あんまり遅いともし西野さんが起きたときに心配されるから。」

「分かりました。それでは本日は最重要事項のみで……あの方が失踪しました。」

「あの方？ま、まさか角の奴じゃないでしょうね？」

「……そのまさかです。」

「なんかその流れどこかであつたかも……それで？」

「はい、先日あの方に姫様の事をお知らせしたのですが突然、私のライバルが死ぬわけない、と仰せられて……。」

「部下やアナタの制止も聞かずに行っちゃったと。」

「はい……」

「はあ……私、アイツには伝えなくていいって言わなかった？」

「申し訳ありません。司令達がうっかり漏らしたようで……それが私に飛び火して……」

「あー、何となく察したからもういい。」

また面倒な事になった。古姫の時みたたくここに気づかれると厄介極まりない。

「海岸の痕跡は？」

「はい、駆逐古姫様が手掛かりにしたと仰られたものはすべて抹消しておきました。」

しかし、これでも安心できない。

「司令達は？何か言っていましたか？」

「捜索隊を出しました。見つけ次第取り押さえると。もし、仮に、そちらに現れる事があれば処分は任せると。」

また面倒な事を押し付けられたものだ、と思いたい所だがこうなった要因は自分にあるし言えないかな。

「分かりました。必要ならば私の方で始末します。」

「かしこまりました。その様に伝えておきます。それでは。」

「もう行くの？」

「はい。姫も早く戻りたいでしょうし、私もバ…次の任務があるので。」

「そう……ではまた。」

そう言つてリ級とは別れた。リ級は次の任務がそんなに大変なのか、猛スピードで帰ってしまった。

「私も帰りますか…」

西野の元へと夜道を歩くナギサ。するとふと嫌な予感がしてしまった。

「そう言えば前日も報告を受けてすぐトラブルになっていた気が……。西野さん!!」

ナギサは大急ぎで家へと戻った。

「ハアハア…西野さん!」

少し息を荒げてマンション前に帰つて来た。するとマンションの前で伸びている二人の人間がいた。

「つ、つええ……」

「兄貴……」

「スキンヘッド!」

そして、マンションの正面玄関の扉が強引に空いていた。(文字通り穴が)

「ま、まさか!?!に、西野さん!!」

ナギサは部屋まで慌てて戻った。
しかし。

「オラっ!!死ねよ人間が!!」

「うわくん!?!な、なんなのさ!?!」

手遅れだった。部屋から格闘する音が聞こえる。

「あ、あー。これはもうダメかな」

この後の事を考えて頭を抱えるナギサだった。

一方で…

「すー、すー…」 Z Z Z Z Z

この夜、古姫が起きることは無かったのであった。

第13話 結局生き恥を晒すのは君だった

音が止んでから恐る恐る部屋に入るナギサ。

すると息が切れ切れの西野さんに思った通りの人物が無力化されていた。

「ば、馬鹿な…素手とは言え人間ごときにこの私が!？」

「ハアハア…き、キツイ…明日は会議なのに…ハアハア。」

「大丈夫みたいですね。」

「あ、ナギサ!どこ行つてたの?後この子誰?!」

「まずは落ち着いて下さい。今お茶をお持ちします。」

台所から麦茶の入ったコップを3つ持ってきた。

それをとりあえず西野、自分、そして縛られた深海棲艦の前に置いた。まあコイツに

関しては多分飲めないけど。

「ふう……」

一気に飲み干した西野はさっそくナギサに説明を求めた。

「で、もしかしなくてもこの子も？」

「はい。彼女は深海棲艦の姫、重巡棲姫です。」

「重巡……何か強そう。」

「はい。条件次第では私でも勝てません。なのにどうしてこんな事に。」

生身の人間が深海棲艦に、しかも姫クラスに二度も勝利するなんて。普通じゃないですよ。

「西野さん、本当に何者なんですか？」

「ん？私はただの会社員だよ。」

「いやいや、絶対ちげえだろ？」

「これまで黙っていた重巡棲姫が喋った。」

「でもまあ、流石は私のライバルを手駒にした奴だ。人間にしては強いじゃないの。」

「ナギサのライバル？」

「違います。コイツの自称です。前に同じ作戦で絡んで以来ずっと付きまとわれてます。」

「ふん、勝ち逃げなんてさせないよ。」

「はあ…人間に縛られておいてよく言えますね。」

「う、うるさい！」

「あはは♪仲いいね。」

「はあ!?!どこがです(だよ)!?!」

ほら息ピッタシ。

「それでこんなところまで来てストーカーですか？」

「ストーカーじゃないし！」

「じゃあ何ですか？」

「だ、だって……お前が行方不明って聞いて慌てて帰って来たら実は生きてるって聞いてそれで……」

「重巡棲姫……」

なんだ、がらにもなく心配してくれたのか。

ナギサは少し不憫になり彼女の拘束を解こうとした。

「もしかしたら人間に捕まって生き恥晒してるって思ったらいとも立ってもいられなくてな！」

「ムー」

ナギサは拘束をさらにきつくした。

「ぎゃあああ!!絞まる!首が!!」

「生き恥晒してるのはアナタですよ!さっさとくたばれ!」

「ナギサ!ナギサ!いくら深海棲艦でもここを殺人現場にしないでよ!」

西野が止めに入ったことでナギサはようやく止めた。

「はあはあは……。死ぬかと思ったぞ。それにしても。」

「ここにきてようやく彼女は西野の方を向いた。」

「ナギサってコイツのことか？かわいい名前を付けちゃって……。しかもお前の指示に従ってるしよ、どうやってコイツを従わせてるんだ？」

「まあーなりゆきかしら？」

「はあ!?!私みたく力づくでなく!?!」

「どちらかと言うとナギサからかな。」

私はこれまでの経緯を説明した。

「へえー。お前にそんなかわいい一面があるとは。」

「絞め殺すぞこら。」

「わかってくれた？」

「そういうことにしてやる。もう襲わないからこれ、解いてくれよ。」

「ああ、うん。わか」

「御断りです。」

「ナギサ!?!」

「いくら主人が許しても、メイドたる者として西野さんに害を成した奴を生かしておく道理はありません。」

おいこら、それなら古姫はどうなる？

「それにです。私はコイツの処分を本隊から一任されています。」

「はあ!?!それはどういふことだ!?!」

「これには重巡棲姫が激しく動揺した。」

「アナタ、勝手にこつちに來たそうですね。しかも作戦途中で配下の艦隊を放つていつて。南方司令様はお冠ですよ?」

「そそそそそ、それは……」

「なので私にはアナタをここで処分する権利があります。帰つて処刑されたり、生き恥を晒すより、ここで私に始末された方がアナタも辛くないでしょ?」

「ふん。そうだな。」

何故かあきらめた重巡棲姫と艦装を展開してとどめをささそうとするナギサ。

「はい!ストツプ!」

「これに間髪を容れず西野は止めに入る。」

「西野さん!これは深海棲艦としての問題です。」

「そうだぞ!手出しするなよ!」

何なのこの子達はもう！

深海棲艦って皆こうなの？

「ナギサ、私言ったよね。ここではメイドらしくしてなさいと。」

仕方ないので西野も少し本気を出す事にした。

その圧力に押されたからなのかナギサは背筋を伸ばした。

「は、はい！」

「それで？メイドは何時いかなる時もどうしろと？」

「はい！主人の命に従えと！」

「なら、私がさっき言った指示は？」

「ここを殺人現場にしないことです!!」

「よろしい。あ！ここじゃなければいいとかでもないよ。」

「分かりました！しかし、それだと……」

ナギサはこの深海棲艦をどうすればと聞いてきた。

「この子に罰を与えればいいのかね？」

「まあ、そうです。しかし重罪ですので重刑でなければ上もコイツも納得しないかと。」

「そうだそうだ！重刑だ！」

さつきから何なのこの子。

「はあ……。なら、この子の身柄。私がもらってもいい？襲われた私の為に、そしてこの子に死ぬより辛い罰を与えるからさ。」

「は、はい。西野さんがそこまで言うなら。しかし、どうするのです？」

「ふふふふ……♪」

襲撃から数日後

「殺してくれ……」

「え、やだ。」カシヤカシヤ

「いやー。流石は我が親友。こんな贈り物をくれるなんて♪」カシヤカシヤ

「ナギサ。次の服を持ってきて。」

「かしこまりました。」

「け、軽…ナギサ！た、助けて…」

「諦めて下さい。この二人相手では無理です。」

重巡棲姫はアニメのコスプレ衣装を着せられてカメラに撮られていた。だが、これが彼女の刑罰ではない。

「まさか私にも同居人ができるなんて！西野様様だよ！」

「いや〜。私も古姫の件で色々やって貰ったからそのお礼だよ。」

彼女は東田の所に身を置くことになったのだ。

初めは何度も脱走を図っていたが昨日とうとう諦めたようだ。

「彼女の刑罰は、東田さんの遊び…同居人になって着せ替え人形になることよ。」

「確かに……。生き恥通り越して拷問ですよ。」

「人外つ子が着てると思うと…。。。ぎゃあああ♪興奮する！ほら、次はこれよ！これ！」

「こ、この人間ヤバイぞ！もうやだ！もう帰りたい！それがダメならいつそのこと…いやあああああ」

「全く。生き恥晒した私見たさに来ておいて、結局生き恥を晒すのはアナタの方じゃないですか。」

ちなみに彼女はこちらで処理したと司令には伝えたので彼女は轟沈扱いだろう。軽はずみな行動でこうなった彼女にほんの少しだけ同情するナギサなのであった。

「あつ！ナギサちゃんもツーで撮ろ！」

「えっ!?!」

第14話 古姫中学校へ行く!

新たな深海棲艦の襲来なり古姫の勉強なり新規事業の打ち合わせなんかをやっているうちにその日はあつという間にやって来た。

「ふふくん♪」

「こちら古姫! 楽しみなのはわかりますけどぼおつとしてないで朝ごはん食べなさい。」

「はあ! ごめんなさい姉様」 シュン

ナギサに注意され少し萎む古姫。

まるで本当に姉妹みたいだな。

「ふふふ。そんなに待ちきれない?」

「うん!」

古姫は満面の笑みで答える。

そう、今日から市立の中学に通学するのだ。

「そっか。ならなおのことボロを出したらいけないよね？私が言った事を必ず守るのよ？」

「わかったわ。」

「よし。じゃあアナタの名前は？」

「西野古姫です。」

「うん。間違っても本名を名乗らないように。」

間違っても駆逐古姫なんて名乗った日にはどうなるのやら。

「クラスでの自己紹介は大事だからね。」

「どうして……？」

「もしそこでそこまで好きじゃないのにアイドルが好きなんて言ったらずっとその設定でいかないといけないし、真面目過ぎても距離を作りかねないし、逆に尖り過ぎてもそれからずっと変人認定されるし……うあああ!!」

「西野!?!」

「に、西野さん!?!」

西野は勝手に自滅した。

「と、とにかく出だしでしくじると大きな禍根になるよと。」

「な、なるほど……」

な、なにそれ。西野が、あの西野がここまで恐れるなんて……凄く怖い……。

「それじゃあ他の言い付けは？」

「バッチシ覚えてる！ 艦装は出してはいけない。力は常にセーブしろ。後殺意はしまえ。」

「よーし！ あとの常識については多分わかっているだろうし何よりそんなのを学ぶのも学校に行く理由だからね。思いっきり楽しんで。」

「うん！」

「はいはい、二人とも。話はそれぐらいにして早く食べちゃって下さいね。遅刻しますよ。」

「あ、いけない！ 今日会議の日だ！」

「初日遅刻は不味い！」

二人は慌てて朝食を食べた。

古姫がこれから通う学校は戦争勃発後に再編されてできた新しい学校です。

過去に本土が攻撃を受けた事を背景に場所を移したり数を減らしたりした結果だそうですね。

「アナタが今日から転入してきた子ね。担任の神取です。これからよろしくね。」

古姫を出迎えてくれたのは眼鏡の似合う綺麗な女性だった。何でも担任のようだ。

「ええつと…西野さんは遠くの島から疎開して来たって聞いたけどもうこっちの生活には慣れた？」

これは西野から事前に聞かされていた設定だ。

もちろん回答も準備している。

「はい。今はお母さんと姉様と一緒に暮らしてます。」

「そう、よかった。何か困ったことがあれば何でも相談に乗りますからね？」

「はい。ありがとうございます。」

よし!ここまでは順調!!

しかし、問題はその後……。

神取先生に連れられて教室に向かう古姫。

その後ろの角から二人を観察するものがいた。ナギサだ。もちろん例の装置を使っている為誰にも見られていない。

「古姫……大丈夫かな?」

心配で勝手についてきたものの勝手な事をすれば西野に叱られるのでただ見守るナギサだった。

そしてとうとうその時がきた。

教室内ではホームルームが始まっており、古姫は外に待たされている。呼ばれるまで待てとの指示だ。

「えー。それでは、今日は皆さんに嬉しいお知らせがあります。」
神取先生の言葉で教室が少しざわめく。

「なんと！今日からこのクラスに新しい仲間が増えます！」

このセリフでざわめきは騒音へと変化する。

この音の変化により古姫は一気に緊張した。

（お、おお落ち着いてよ私！これまで死線を越えてきた私よ！艦隊相手に一人で暴れたこともあるのよ。今さら30人程度の人間に何を怯える必要が！）

そう自分に言い聞かせていたところだった。

「西野さん、入って下さい。」

名前が呼ばれた。合図だ。

（い、いやだ！入りたくない！なんか怖い！）

しかし、古姫は誰かに背中を押される。

「えっ!?!いや、ちよつと！」

古姫は教室に入ってしまった。

なぜこうなってしまったのかは分からなかった。しかし、

「ふう……。文字通り、背中は押ししましたよ。あとは頑張ってくださいね。」

誰もいないはずの背後からそう言われたのはわずかに聞き取ることができた。

(もしかして姉様? いやなぜ姉様がここに?)

しかし、古姫にその疑問を解く時間はなかった。

「わー! 女の子だ!」

「やった! 女子だぜ! しかも可愛い!」

クラスの注目が古姫に集まっていた。

先生に促され古姫は教卓の前に立った。

(うう、これがクラスの自己紹介というやつか。)

確かにこれはキツイ。今まで人間に向けられたことのない種類の視線だ。なんだかむずかゆい!

「それでは、西野さん自己紹介を。」

「は、はい！」

しかし、先ほどよりは緊張がない。

姉様疑惑のせいで気がそれたお陰だろうか？

よし!!

「西野古姫です。これからよろしくお願いいたします。」

「それで？どうだった？」

「最高！クラスの人間達と仲良くなったよ！」

「そうはなりより。」

西野が帰って来るなり古姫は嬉しそうに今日の出来事を報告した。西野もこんなに嬉しそうに話す古姫を見て仕事の疲れが飛んでしまった。

「二人とも。ご飯の支度ができましたよ!」

「はい!」

「行きますか。」

二人はテーブルへと向かう。

その時にナギサの横を通る古姫は小声で伝えた。

「ありがとう姉様……」

「どういたしまして。」

古姫は席へとついた。

続いて西野がナギサの横を通る際に小声で伝えた。

「勝手になににしてるのかしら?後で部屋に来てね♪」

「……はい。」

古姫の学生生活は良いスタートを切れた。今晚は楽しい話題で大いに賑わった。約一人を除き。

深夜のコンビニの話 2

深夜のコンビニ

戦争開始から人の動きもほとんどないこの時間帯に明かりを灯している数少ないものである。

そんな夜の町の灯台に今晚もシフトに入る一人の男がいた。

「あ、南波君。今からなの？」

南波と呼ばれた彼は女性に声をかけられたから少し照れながら答える。

「おう立花さん。あれ？店長は？」

いつもなら真つ先に声をかけてくるであろう店の主がいなかった。

「うん。店長なら今朝から風邪でお休みだって。」

「そ、そっか。お大事にだな。」

そう言うと南波は店の奥へと入りバイトの制服に着替える。

着替えてから店頭に立つ。

(き、気まずい……)

この静かな店内には客はいなければ店長もいない。南波と立花の二人つきりだ。

静かな上に何もすることの無い分余計に意識してしまう。

「南波君？」

「へえあ!？」

突然声をかけられて変な声が出た。

これに恥ずかしさで真っ赤になる。

「なな、なに?！」

「いや、暇なのにそこで立ってても辛いだろうからこつちで座ってたら? お茶入れるよ

「？」

「お、おう…ありがとうございます…」

立花に促され休憩室に向かった。

いつもの定位置に座ると立花がお茶をいれてくれた。

「はい。」

「ありがとう。」

恐る恐るお茶を手にとり南波はお茶をすする。

立花は南波の近くに座るといつも通り売り上げの計算を始める。

休憩室はたちまち南波のお茶を飲む音と立花のペンの音だけとなった。

もちろん。こんな状況では南波の内心は穏やかではなかった。

（しまった！お茶をいれてもらえぬ事に浮かれてたがこれは向こうで突っ立てるよりキツい！）

いつもなら店長もいて落ち着くはずの時間が、今では幸運なのか不幸なのかわからない。

「……」じろ

南波はそつと立花を見る。

ここしばらくで髪が伸びた立花はロングを一本に束ねポニーテールにしていた。

それだけでもなかなか眼福だったが、この髪が存在がこれまでも目を見張っていた彼女の白い肌をより認識することになった。

（うう、立花さんが計算に夢中で少しうつ伏せるとギリ隠れてたうなじが……つて！
何を見てるんだ俺はよう！）

南波は目を逸らそうとする。しかし、目は正直だった。じつと彼女から視線をずらさない。

（ぐああああ!!見てしまう!どうしても見ても見ってしまうんだよ!不味い!こんなの立花さん

にバレでもしたら!!)

しかし、当の本人は気付かない。

そんな中、いつも彼女の計算している姿を盗み見している彼はある異変に気付いた。

(あれ?)

立花：：いや、リ級は今日も黙々と計算していた。しかし、頭の中は全く集中できていなかった。

リ級は悩んでいた。

一体何にそこまで悩んでいるのか?

少し前までは変装の為とは言えども髪を伸ばした事を面倒がつていたがそれもポニーテールにして解決している。

では、何にそれほど悩んでいるのか?

それはこの状況である。

店長がいないのが彼女にとっても大問題だったのだ。ただし、南波と二人つきりなのは別に気にしてない。

(店長がいないからお菓子貰えない……)

今彼女がやっている計算はお菓子と引き換えでやっている。しかし、今日はお菓子をくれる店長が不在でどれをもらって良いのかわからず手が出せなかった。

いくら対価の約束はあるとは言え勝手な事をして万が一問題を起こせば彼女の苦勞は水の泡。

ここにはいらなくなり今後お菓子にあり付くことや任務に支障が出てしまう。なので今日はおとなしく仕事だけして帰ろう。

と、思っていたのだが

(ああ〜甘いもの欲しい〜！)

我慢しなければと思うほど欲しくなってしまう甘味に彼女の思考はここに有らず状態だった。

(うへえ〜クリーム…、チョコ…)

なので声をかけられてもしばらく気が付かなかつた。

「立花さん。」

「ひい！あつ南波君…：なにかしら？」

「いや…：何かいつもと様子が違うと思つて…：後、そこ計算間違つてる。」

「え?!あ、あああ!ホントだ!うわっ!元から数字ずれてる!」

「計算ミスるなんて立花さんらしくないな。どうしたの?」

「い、いや何でも…：ないよ。」

言えるか。栄えある深海棲艦の重巡洋艦がまさか甘味欲しさにぼーっとなつてたな

んで下等生物に知られてたまるか。

「ふーん。まあ、無理しないでよ。あ、そうだ！」

突然立ち上がると南波はレジの方へと行ってしまった。

「南波君……？」

南波はすぐに戻ってきた。

その手には新発売のチョコがあった。

「立花さん、はい。」

「えっ？でもそれ商品……」

「大丈夫。会計は済ましてる。」

南波は自分の財布を取り出して見せた。

「でも……いいの？」

「おう、何か疲れてるならそれ食って元気出せよ。」

「じ、じゃあ、いただきます……」

立花はチョコを受け取った。

冷静を装うが内心は大喜びだ。

(やったあああああ♪チヨコだ♪しかも前から食べて見たかった新作の！)

「あ、ありがとう……」

しかし、喜びのあまりニヤニヤが少し出てしまい綻んで見えた。

「いやいやいいよ。お茶の礼だ。」

なんて南波も澄まして見せたが彼の内心も大荒れだった。

(うおおおおお!!あの立花さんが微笑んだ!すっげー可愛い!)

お互いいつもなら出さない顔をしているがお互い相手の顔どころではない。自分を静めるのに手一杯だった。

(やつぱ買ってよかったな。)

いつも彼女を見ている彼は立花のわずかな変化に気付いたのだ。それで元気にして甘くて甘い物をあげることにしたのだ。

……店長がいなくてお菓子を食べさせる人がいないので彼女が食べる姿を見れなかったのが寂しかった気持ちもちよっぴりあったのは秘密だ。

その後、お菓子を食べて元気になった立花はあつという間にミスを直したりしている
と二人のシフト交代の時間がやってくる。

「それじゃあねーまたね南波君。」

「おう、またな立花さん。」

二人はまだ暗い道をそれぞれ帰って行く。

（立花さん。可愛いかったな笑ってくれたし……よし！次も何か差し入れしよつと！）

（南波君……人間にしてはいい奴だ。よし、アイツも殺さない人間リストに入れてやる
か。）

と、かなりすれ違っているが仲は深まった二人だった。

第15話 隠し事ばれちゃいました!

「行ってきま〜す♪」

「行ってらっしやい。」

古姫は元気に挨拶をして学校へと行く。

「はい、西野さんコーヒーです。」

「ありがとうナギサ。今日も楽しそうだね。」

「ええ、よほど気に入ったのでしようね。」

「私も頑張るかな。あ、そういえば。」

「どうかしましたか?」

「いや、あんまり気にはしてないけど最近掃除の不良見ないなって思っで。」

「本当に関係ないですね。」

「カゾエウタ〜♪」

古姫が気味よく歌いながら西野の家のあるマンションを出ると今朝も掃除をしているスキンヘッドとピアスがいた。

「おはようございませす！」

古姫は二人に向けてとびつきりの笑顔で挨拶をする。

それで古姫に気がついた二人は挨拶を返そうと振り向く。

「おうよ。おはよう……」

古姫「ニコッ」

「……ぎゃああああ!!ぐふっ……」

スキンヘッドは今朝も死んだ。

「兄貴!?!もうまたっすか……」

「あ、悪夢が……黒服黒髪は怖い!!」

「駄目だこりゃ。完全にトラウマだ。まあ俺も怖いんですけど。」

ピアスは道具を片付けると兄貴を連れて帰る。
日課を終えた古姫は駆け足で学校へと向かった。

「♪」

古姫は学校に到着。教室の後ろの窓側の角の自分の席へと座る。
すると彼女の周りにクラスの女子達が集まってきた。

「おはよう古姫ちゃん！」

「うん、おはよう♪」

「ねえねえ、昨日のテレビ見た？」

「ううん。昨日ずっと宿題してた。」

「ええ、うっそ！なんでなんで！」

「私、途中で来たから付いていけなくて……」

嘘である。

本当は宿題なんてすぐに終わったし、勉強も西野に来年の範囲まで教わっているの

余裕である。

テレビについては西野が録画しているアニメを一緒に見ていたからである。

「なら、私達が教えてあげるよ。」

「うん、任せてよ！」

「そう？皆優しいなあ。じゃあお願い〜♪」

（何この子かわいい……！）

（甘えられたい……！）

（抱かれない！）

「じゃあ休み時間に教えてあげる。」

「あ、勉強と言えば今日の理科は小テストが……」

彼女達の話の聞く一方で古姫は頷きながら

（ああ、勉強できないアピールしたのはまずったかな？）

と、少し悔やんでいた。しかし、何故かそのせいでこうして友達ができたしこの子ら

の話聞くことでこのクラスの事は色々知れたので結果オーライだと思った。

基本的には西野のアニメで見たキャラの真似をして見たのだがここまで好印象を得られるとは。

「アニメ……私の艦隊で教材にしようかしら？」

「古姫さん？今何か言った？」

「はっ！ううん！なんでもないよ！」

なんとか誤魔化した古姫。

しかし、そんな彼女をじっと見ている少女がいた。

「……。」

休み時間

「古姫ちゃん〜。」

古姫の周りにクラスの女子が集まろうとした。
ところが

「ちよつと。いいかしら?」

女子達を遮るように古姫の隣の席の女子が古姫の前に立った。

「えつと……誰?」

「ふん。隣の席なのに誰とは酷いわね。私は」

「北根さん! 私達が先約なのよ!」

「そうよ!」

「ちよつと! 自己紹介ぐらいまともにさせなさいよ!」

「……じゃあ北根さん? 私に何かよう? 用がなければその子達と話したいのだけど?」

「ふふん。いいのかしら? 私と話さなければアナタの秘密をクラスにばらしちゃうわよ

?」

「!」

この言葉に古姫は反応してしまった。

(この子……まさか私が深海棲艦だつてことを……)

古姫の反応を見て脈ありと見たのか北根は

「わかったなら少し付き合つて。」

「……わかつた。」

始末するなら人目がなくなつてから……

「古姫ちゃんダメよ!北根さんは目的の為なら汚い手も使う人なんだから!」

「そーよ!学級委員だし!」

「あんたら!持ち込み禁止物を持つてたのを先生に言われたのどれだけ根に持つてんのよ!!」

廊下の方までやつて来た。

「ここまで来ればいいわ。」

「そうだね。」

「ふん、万が一聞かれたら困るでしょう?」

ええ、そうですね。アナタを始末するところなんて聞かれでもしたら!

「それで話って?」

古姫は北根が余計なことを知っていたら始末するつもりでいつでも艷装を出せるようにした。

「アナタ、皆を騙してるでしょう? ホントはアナタ……」

やるか!

「勉強できるんでしょう?」

「……へ?」

「いやだからね。アナタホントは勉強得意でしょう?なのにできないふりしてるんだもん。気になって仕方なくて。」

「なんだ……」

古姫は展開しかけていたのを解除した。

「バレた?」

「うん、あの子たちはまだだと思っけど、騙すなんてやめときなさいよ? バレた時大変よ。」

「うん、わかった。」

「分かれればいいわ。じゃあそろそろ授業だから。」

北根は教室へ戻ろうとする。

古姫はほっとした。

なんだ。ただのいい奴か。警戒して損をしたと。

「北根さん。」

「なに西野さん?」

「ありがとう♪」ニコッ

「ドキッ!」

えっ!?!なにこの気持ち!?

「あ、チャイム! 戻ろ北根さん。北根さん?」

「……。」

「北根さん？」

「ほええ……」

「それで、どうしたの？」

「うん、嘘ついてたの正直に打ち明けた。」

「そう。」

「うん、でも嫌われずには済んだよ。ありがとうね。」

「私は何もしてないけど？」

「それでも、ありがとうね。」

「ほえ、う、うふん、ならどういたしまして。」

「後ね」

「まだなに？」

「北根さんって友達いるの？」

「……いきなりなに？」

「だって北根さんずつと本読んで誰とも話してないから……。」

「自分で言うのもなんだけど、真面目な私なんかとつるんでも楽しくないからじゃないの。学級委員だし。」

「ふーん。なら私が友達になってあげようか？」

「はあ!?!な、何でそうなるのよ!」

「いや、隣のよしみだし、それにね。」

「それに？」

「私的には北根さんの方が他の子達より気を使わなくていいから。」

「え!?!……ふん! 好きにすれば？」

「うん、好きにするね。これからよろしくね。お隣さん♪」

「……ほええ」

第16話 夜戦最強が聞いて呆れる

「西野さん、お気をつけて行ってらっしゃいませ。古姫も人を殺さないように気をつけて下さいね。」

「はい！行ってきます！」

「行ってきます。留守はよろしくねナギサ。」

二人を玄関で見送るナギサ。

二人が出掛けてしまえばドアが閉まるとナギサはほつと息をついた。

「ふう、今朝は西野さんに叱られるようなミスはありませんでしたね。」

ことメイドに異常なほどのこだわりを持っている西野は掃除や料理はもちろんのこと、仕事中の立ち振る舞いも細かく見ているのだ。

そして何か悪いところがあれば夜のメイド講座にてとことんごうも……こほん、指導されるのだ。

しかし、今日はミスがゼロつまりは……

「まさに完璧な朝！そしてやったね安寧の夜！」

うふふ、これも私が西野さん好みのメイドとして板についてきた証拠でしょうね！

しかも最近は人間の常識も身につけてきました。

そのおかげで前みたいに郵便の人を敵と勘違いして締め上げたりしなくなり笑顔で対応しています。

「でも！油断はせずにこれまで以上に精進を……」

ピンポーン♪

「あ、来客……にしては早いですね。はあ〜い！」

ナギサは仕事用の笑顔になった。ドアを開けて早朝から来た来客を確認する。

「どちら様でしょうか？……はっ？」

「おはようございます姫様！」

ガチャ！

「姫様?!無言で閉めないで！」

「……だってアナタが直接来る時って大抵緊急のヤバイ内容なので。一応聞きますけど」

何のようですか？」

「あ、はい。姫様が申し上げた通り緊急のヤバイです。」

「……とりあえず中へ。」

誰かに聞かれたら不味いので中で聞くことにした。

「それで、今回はどのような？」

「はい。実は……。」

リ級の顔が険しくなった。

「き、基地司令が数日後来ます……」

「……え？」

ナギサはその言葉を理解するのに少しかかった。

そして聞き違いだと思ってもう一度聞き直した。

「残念ながら、基地司令は本当に来ます。」

「嘘です!?!」

そ、そんな!

あの方が何で来るの？いや、それ以上に

「あの方が来たら絶対にトラブルが起きます！」

「あ……確かに問題を起こすと我々が潜伏していることが鎮守府にばれる恐れも」

「私が西野さんに叱られる！せつかく今日はパーフェクトで説教なしなのに!!」

「……はい。そうですね。」

姫よりも西野と言う人間が恐いとは、何者だ？

「では、お伝えしました。」

「では、じゃないです！何しにどこに等とかは無いのですか？」

「用件は私も知りません。ただ、直接ここに来るとのことなので都合の付く日にちを教えてくださいだそうです。」

「本当にそんな所は律儀ですね。週末の日曜でお願いします。」

「かしこまりました。」

後ついでに定期連絡もここで済ませてしまおうとリ級を帰らせる。しかし、先ほどまでの明るい気分はもう帰って来なかった。

その日の夜

ナギサは西野に今日のことを報告した。

「と、言う訳です。」

「何とんでもないことを決めちゃってるの。まったく。とりあえず簡単に言うとなギサの上司が来るの?」

「まあそんなところですよ。」

「姉様……それは本当ですか?」

「みたいですね……」

ナギサと古姫は同時にうなだれた。

「えっ? そんなにヤバい人なの?」

「いや〜なんと言いますか……優しい人なのですが……」

この反応で西野は察した。

「普段は優しいけど怒らせたら滅茶苦茶になるタイプで二人とも過去に怒らせた経験がある、そんなところ?」

「お、お見事……」

「西野凄いく♪」

「で、具体的にどんな人なの？」

「基地司令、港湾棲姫は基地型、上陸型等と分類される姫クラスです。この手の姫たちはこと陣地防衛と陸上活動全般において最強のアドバンテージを誇っています。」

「陸の上だと深海最強！」

うーん、深海棲艦なのに陸にしていること前提なのもそうだけど陸上最強って名誉なの？
「特に港湾棲姫は整備や補給に特化してます。後私はこと夜戦においては最強ですよ！」

わざわざ自慢しなくても……

「ふーん、で。そんなのがわざわざ来る理由は？」

「さあ？それは私にもわかりません。」

「そっか……」

「そ、そうなんです！ではお休みなさい……」

「でもその話で私の胃が死にそうになったから、私のストレス発散には付き合ってもらおうよっ。」

「嫌ー！せっかくのパーフェクト日が!!メイド講座はもう嫌あああああ！古姫！助けて

！」

「西野、姉様、お休み〜」

「うん、お休み古姫ちゃん。」

「裏切り者〜〜！」

「さあ！楽しい夜の始まりだ！」

がしっ！ズルズル

「もう〜（涙）夜恐いの〜。西野さんのせいで夜が恐いの〜！」

「まったく。夜戦最強が聞いて呆れるよ。」

ナギサが悪夢の夜戦ルート（メイド講座）へ突入したころ。

例の深夜のコンビニでは……

「……ふう」

「立花さん？何かフラフラしてるけど大丈夫？」

「店長、大丈夫です。」

「そ、そうかい？」

立花ことり級は疲労がピークになっていた。

それもそのはず、基地司令の日本訪問が決まってからその打ち合わせや下準備で基地と隠れ家を行ったり来たりしているのだ。海軍の警戒を掻い潜る今のルートを秘匿するのにも一苦労なのに、それを何度も行い長距離航海を行うのだ。

疲れない方がおかしい。なのにバイトをサボらないのはこれこそ彼女の生命線なのに外ならない。

（また売り上げ計算してお菓子貰って……それから上がるついでにエナジードリンクも買っておこうか……）

糖分とドリンクでどうかしのいでいるり級。

しかし、それもここまで来ると当然ポロが出る。

「あ……」

ふと体から力が抜けて倒れそうになる。

「うおっと!?!」

それを南波がどうにか抱える。

「大丈夫か?!」

「え、うん。大丈夫……」

「いやいや、どう見ても大丈夫じゃないだろ。」

この状況は二人にとつてはあまりよくなかった。

り級にしてみれば弱っているとはいえ人間なんぞに支えられているなんて我慢ならないが先ほどから本当に力が出ないので助かったと素直に感謝している気持ちが押し合っており、素直に感謝できず。

南波にしてみれば、本当に立花を心配している気持ちとそう思っているからこそ今の状況を少しラッキーと思ってしまったことに残悪感が発生している。
つまり。二人揃って

(不味い……なんか気まずい……!)

と思つてしまった。

「はあ。やれやれ……」

この様子を見ていた店長は助け船を出すことにする。

「ほら、やつぱり元気ないね。立花さんは休憩室で休みなさい。」

「はい……」

「南波君、休憩室まで支えてあげなさい。ついでに南波君も休憩入つて立花さんの面倒を見てあげてね。」

「はい……えっ?」

「私はレジに立つてるから。頼んだよ。」

南波君……

頑張つてね♪

「……。」

(えええええっ!?)

突然の店長の優しさとお節介に驚く南波は叫ぶのは内心だけに押さえた。

「ふら〜」

「はあ。仕方ない。ほら、行くよ立花さん。」

「うん、ありがと…」

こうして立花と南波は休憩室へと向かった。

この翌日

リ級は打ち合わせのために再び航海へと出るのだがその足どりは軽くどこか楽しそうに見えるのです。